568
180
568-189
1200501515714

The garden of proserpine

詩人ウイツシー

正富汪洋著

昭和二年五月
帝國圖書館

—1927—

新進詩人社發行

ウスイバンー

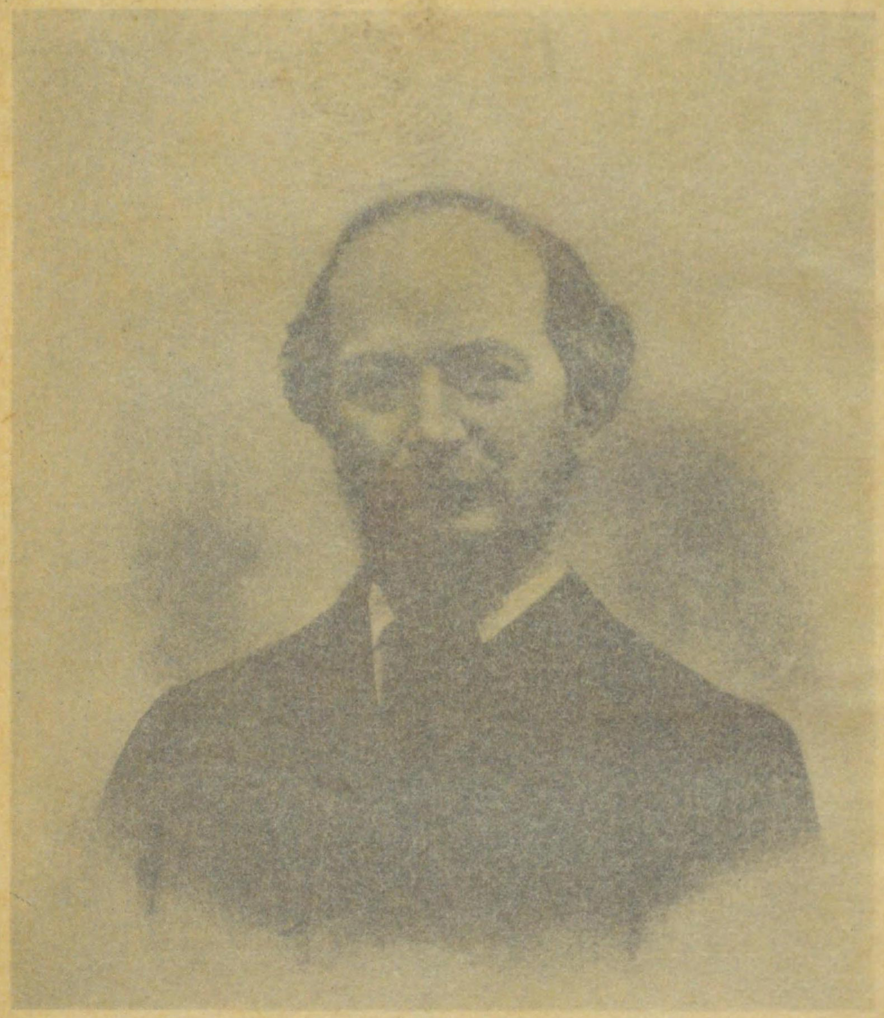
詩人

正富汪洋著

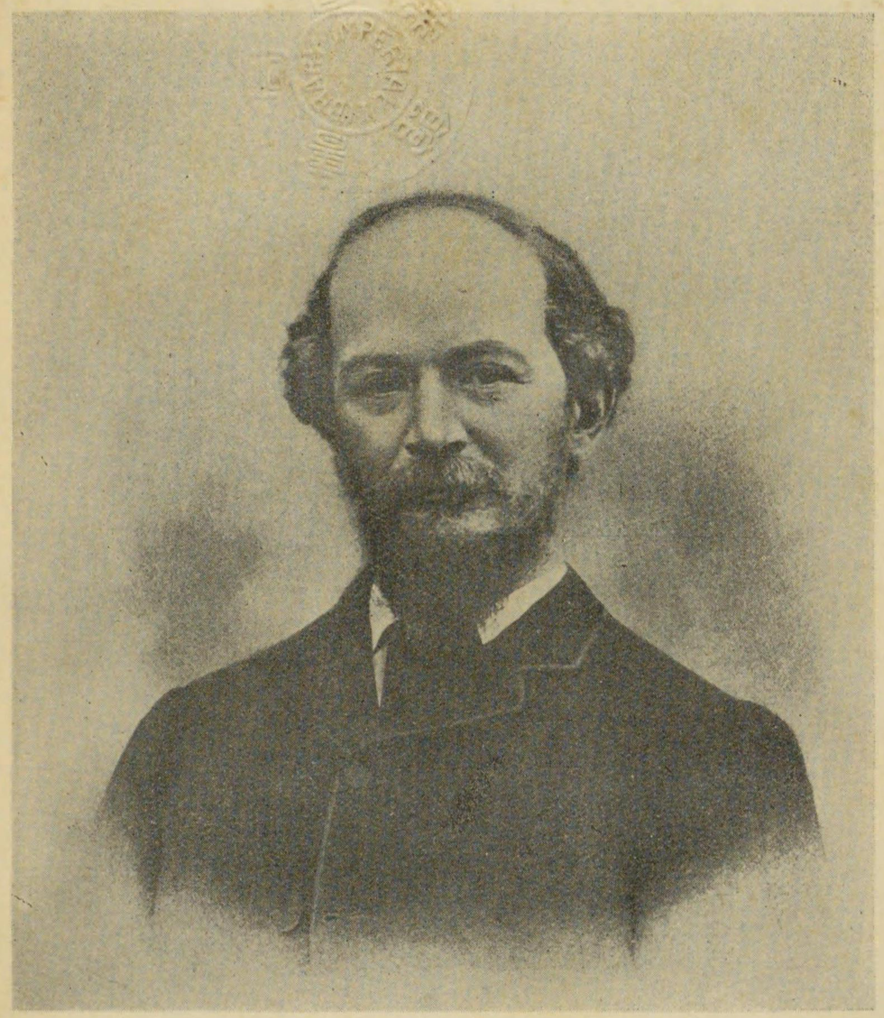
昭和二年
内務省圖書

—1927—

新進詩人社發行



A. C. Swinburne



A. C. Swinburne

568-189

目次

幼年時代……一
ヴイクトリア朝の Quartette の一人、全身皆韻律とも謂ふべき大詩人、彼に對比すべき近代英詩人無し——優秀の批評家——誕生——父系母系——幼年時代に親んだ家、海、——讀書を好む——ノーサムバーランド——語學——博識人を驚かす。

イートン時代……六
年齢十二にしてイートン校に入る。大頭——容姿頭髪の色——校中第一の大帽子ワーヅワースを訪ふ——早熟兒——圖書館通ひ——佛、伊兩國語を能くす——「神經發」のあだ名——狂スウインバーン、イートンを去る。

オクスフアード時代……一〇
オクスフアードのペエリアル、カリツヂ入學——軍人志望——獨逸に旅行す——作詩——友人——オールド、モータリテイ、ササイエティ——ブラウニングを愛讀し、ラスキンを讃ふ——ウイリアム・モリス——ダンテ・ゲイブリアル・ロウゼッティ——

バーン●ジョンズ――ジョン●ニカルとテニスン訪問――カアライル崇拜――アーノルドの講義に反感を有つ――ラスキンを知る――ユーゴーのものを愛讀す――學校より危險視せらる――惡評を負つてオクスフアードを去る。

ロンドン生活……一五

父の怒――ロンドンに入る――佛國に旅行しついで伊太利に遊ぶ――兄の如きロウゼッティとの交情深まる――モリス夫人を敬愛す――レディ、トレヴエリアンと交りその夫の嫉妬するところとなる――スコットを訪ふ――ミルンズと交る――戴曲『母后とロザマンド』の發行と不評判――詩劇『シヤート●ラー』――人知れぬ戀――『時の勝利』――ダンテ●ゲイブリアル夫人の死――リチヤド●ハットン――彼の詩文、新聞スペクテーターに現れ初む――ボオドレールとの書面の往復について――ボオドレールに對する挽歌『會釋と別離』――『ルバイヤット』の詩形――ホイツトマンの『草の葉』愛讀――ウイリアム●サツカリイに面會――サツカリイの娘離別を惜しみ泣く――急激革命主義者と誤解せらる――ホイスラーと交る――癲癇的病氣――不朽の名作『アタランタ、イン、カリドン――妹エジスの死――『チヤペルの子供』――『歡樂の巡禮』――フロレンスに入りウオルター●ランダーに會ふ――シーモーア●カーカツプと會談す――『イティラスの詩』――メレデスと不和

名作に對する攻擊と彼の反抗……二五

名作『アトランタ●イン●カリドン』の完成その中の合唱歌――古代詩に於てはその技ミルトンを凌ぐ――『シヤートラー』――リチヤード●バートン及びジョオジフ●ナイトと交る――詩の暗誦と淑女等の喝采――その當時の諸詩豪――ラスキン詩書の刊行を奬む――テニスンと會ひし時の彼の態度常規を逸す――所在不明――好評の『ヴィーナス禮讃』――『詩と俗謠』出でゝ攻擊するものあり辯護するものあり世論を沸騰さす――反道德的の詩なりとして教科書又は詩選に收錄せられず――反抗的態度を持續して屈せず――『詩と俗謠』の攻擊に對して辯駁文『詩と批評について』を公にす――テニスン以來の大詩才

共和政治に對する熱情と『日の出前の歌』……三三

彼の共和政治熱マツジーニーとの面談――英國五大哀吟の一としての『會釋と別離』――『伊太利の歌』出でゝ又物議を釀す――パンフレット『英吉利に訴ふ』が新聞雜誌記者を怒らす――『シイナ』――海に溺れ辛くも救はる。若きモーパッサン此救はれたる詩人の世話に自ら進んで當らんことを乞ふ――『ウイリアム●ブレエク』出版――『コールリツヂ詩抄』出版――ユーゴーに會はむと佛國に到る――『日

の出前の歌』出版とその詩の朗讀時の感激――『佛蘭西共和政治の宣言歌』――『日の出前の歌』は紀元前第五世紀希臘の宇宙學的聖歌以來比肩するものなき什――

獨立自恃、ペンに親しむ……三七

藝術倶樂部――社交界を退き孤立す――『ボスウエル』――ウオルター・ペーターとの昵近――ブラウニング訪ね來る――詩のあらゆる形式を試む――米國エマスンの批評の不當について書を送り返翰を求む――カアライルに對して不遜の態度を示す――ワッツ・ダントンとの交遊――グレードゼームス街の住居――『ボスウエル』出で大好評を得――論文『ジョオジ・チヤプマン』――旅行――父の死――『シヤアラツト・ブロンテに就いて』――ユーゴーよりヴオルテールの百年祭に英國詩人代表者として來れとの招待を受く――第二『詩と俗謠』出づ――オスカー・ワイルドがホートンに詩人と對面すべく紹介を乞ふ。

バインズ、パトニイに於ける生活……四三

病詩人ワッツのパトニイの別莊に移さる――晴雨に關らず必ず散歩す――晝寢――デキンズの著書愛讀――『シエークスピヤー研究』――『大潮の歌』――『歌の研究』――『メリイ・スチユアト』――『トリストラム』――パリにゆきユーゴーを訪ふ――循環句法詩――クリスティーナ、ロウゼッティ女史に詩集をデジケートす――『盛夏の休日』――『マリノ・ファリエロ』――『ユーゴー研究』――『ロツクライン』の好評――ワッツとの親交――モリス數々パトニイに來訪す――友人達の死――不和のメレディスの七十歳祝賀にエドマンド・ゴスの仲介にて友情を回復す――戲曲『妹姉』出版テニスンの死後桂冠詩人に推されんとしたがグラッドストンの反對に遇ふ――傑作長篇『バレン物語』――モリスの死――母の死――肺炎――抒情詩集『船路』――小說『戀の横潮』――『ガンデアの公爵』――ユーゴーの書を愛し修繕に製本屋に出すことをも忌ふ――ワツツ、ダントン流行性感冒に惱む――ワッツの友情――雨中の散歩――病氣――熱にうかされて希臘語にて話す――七十三回の誕生日――水仙の花――永眠――生前愛した、海の波濤の聞ゆるボンチヤーチ寺の墓

性格と自ら選んだ位置……五六

身長――特種能力――虛飾を避く――彼自らの位置をシエークスピヤー、ミルトン、シエリの次に置く――彼を途に要擊せんとした詩人の巨漢、何ら爲す事もなくして尾行す――シエリの後身と謂はる――作品と著書發行の年

ダントン夫人の觀たる詩人の家庭生活……六二

——ダントン夫人の詩人に關する著作——バレン物語の愛讀より、詩人と、一層、親しむ——一つ家にスウインバーン、ワッツ・ダントンと共に住む——詩人の書物に於ける愛——マントルピースの三つの燭臺に於ける蠟燭にて讀書——一見詩人か音樂家かと思はせる外貌擧動——頭の大きく見ゆるは髮に因る——肩の急匂配——やゝ異常な歩き樣——歩きつゝ詩の大要を組織するらしい——山櫨を特に愛好す——時間嚴守と散歩——ユーマア——デキンズの著作を愛し又デキンズの如く聽衆に向つて讀む事を好む——貧人を愛し富者を怨む社會主義的傾向——小兒を愛す——二重人格——

革命的情熱、比を絶つ國語の妖術……七〇

古き佛蘭西の火は最後に彼の松明に燃ゆ——自由を愛する彼の近代的戰爭心——感情の洪水——英國の誇りである革命的情熱——學識の卓越該博と外國の詩歌に通曉——自由に伊、佛語の詩を成す——散文——先人に對する批評的讃辭——自分の詩歌の形式を古代化せんとす彼は他の時代にも住む——神話愛好者——國語の妖術——韻律に優れた高級な抒情詩形に於て比を絶つ——海は戀人——彼の七絃は自由、諧調、感情、宿命、自然、愛、名聲——共和政治の桂冠詩人——英國文學を豐饒にす——能力ほどに世間より好遇せられず然し、世間の讃賞に左右せらるゝ程の人物に非ず——彼の詩は難解——詩篇イティラスと故事

詩篇

イティラス……八三
配偶……八九
會釋と別離……九四
小兒の笑ひ……一〇一
小兒の感謝……一〇四
日沒前……一〇八
歌……一一〇
音樂……一一三
別離……一一四
海の戀……一一七
ウヰリアム・シエークスピヤー……一二〇
告別……一二三
フリップ・マツシンジヤア……一二七

目次

春の獵犬冬を追ふ時……一三〇

目次終り

詩人スウインバーン

幼年時代

詩人、アーサー・シマンズは、テニスン、ロウゼッティ、ブラウニングとあはせて、ヴィクトリア朝の Quartette と、賞揚せらるゝアルジアナン・チャールズ・スウインバーンを評して『彼は全身皆な韻律であると謂ひ得べき大詩人だ、波の如き抑揚、火の如き熱情、彼に對比すべき英詩人は近代に無い。現代では、イェイツの他に詩人らしいものは無い甚だ寂しい、而してイェイツは幻影の一種で實體でない、戀愛又は婦人を歌つても幻影の如き戀愛や婦人であつて彼の詩の夢は鈍く重苦しいと』云つた。

まことに、スウインバーンは、英國詩人中、燦たる光彩を離つ大きい詩人であるのみならず、優秀な批評家である。

此の大詩人は、一八三七年四月五日、ロンドン、グラウヴナーのチエスター街に、ノー

詩人スウインバーン

サンブリアンの廣大なる領地の監理をした名家の後であるアドマラル・チャールズ・ヘンリイ・スウインバーン(1797-1877)と、アシバーナム第三伯爵のジョオジの令孃、レデー、ジエーン・ヘンリエッタ(1809-1896)との間に六人の子の長男として生れた。

父系母系の何れからも曾て學者も詩人も出ては居ないが、この貴族階級からは、政治家軍人、地方長者を産んでゐる。たゞ一人、ヘンリイ・スウインバーン(1743-1803)だけは、ペンによつて名譽を求めた。

父、アドマラルはミラバウの友人である第六從男爵の第二男で、機械學を好み、少しは音樂に趣味を有つたが、文學をば好愛しなかつた、詩人は、その面貌と、心性の幾部分を母から承けた。母は教育ある上に、著しい文學趣味を有つて居り、幼時、フロレンスに在つたので、俄太利語に明るく、又佛蘭西語に通じて居た。詩人はこの母から、早くよりこれらの國語を教へられた。

アルジアナンは、幼年時代を、兩親と共にウエート島の南部の田舍及びノーサムバーランドで過した。

彼は生れた時は一時間も生きないであらうと想はれたといふやうなことも耳にしてゐたらしいが、その眞僞は兎も角、神經質的に弱々しい體格に見えた。然し小兒時代の、ちよつとした病氣の外、重病には罹らなかつた、內質的に強いのであつた。

詩人の父は、村の東端、ボンチヤーチの大きな家、イースト・デーンを借りた、家の庭園芝生は海岸まで南下してゐた。家の南東は無際の太洋を眺望するに適した。直ぐ東に地の裂け口や、蔦などの絡んだ恐るべき未開の崩れ地があり、西には、マンクの灣や、埠頭や漁船の浮んで見えるハアスショー灣があつた。かやうに四方が眺望よき場所は、至幸な放たれた小兒にはトム・チドラー、グラウンドであつた。

ボンチヤーチから五哩東に、アングクリフと海との間の公道にウイロビー・ガードンの家「果樹園(オーチヤード)」があつた。そして又、詩人の伯父伯母、ヘンリイ・ガードンとメリイガードンもボンチヤーチから同じ距離に、ノースカートに住んでゐた。彼等の子と、アルジアナンは、屢々、祖父母の海岸の家オーチーヤドに遊び、小馬に乘つて從僕に助けられて居たこともあつた。又、或時は從兄弟と、セント・カザリン岬の海やバツカスター灣やニタンのうねつた草小徑又は丘を超えて、チエルに遊ぶこともあつた。

高い所に登つてゆくこと、散歩すること、馬に乘ることの樂しみも相當に味はつたであ

らうが、彼は最も海に在ることを好んだ。彼は、『鹽は私が生れない前から私の血の中に入つてゐたと謂ふべきだ。私は父の裸腕に抱かれ、手の間に振り廻され、投石紐からの石のやうに、投げられ、喜びの笑ひを上げてやつてくる波に頭を向けたりした樂しみに增すものを幼年時代に持たなかつた』『恐れたものを記憶するが海をば決して恐れなかつた』と云つて居る。

幼年時代から、書物を讀むことが至つて好きで、從姉妹のデスニイ・リイスは、『彼は食事の時も、書籍を持つことを許されてゐた』といつた。

彼の幼年時代のカフエタン訪問は彼の詩の上に大いに力を與へてゐる。彼はノーサムバーランドに、夏の終と秋のはじめを過すことが多かつた。これはボンチヤーチやニタンの酷暑を避けるためであり、從兄弟達もそこに集つて湖上に漕ぎ、美しい花園や森を、遊びさまよひ、小馬に乘つたりして、少年の喜びに醉つた。

この地が、スウインバーンの天才に力の要素を與へた事は、南方ウエート島の叢林が、快感と諧調を與へたことと共に注目に價する。彼の生涯を通じて彼の南方の景色の概念はボンチヤーチの羊齒多き溪から花園のあちら船路の眺めであり、此方では、大きい鐵色のバムバラーの砂原のあちら、灰色の嵐に搖れる太洋の眺めであつた。

急速に發展した智慧は、なほ母親によつて刺戟され深められた。この母は精神問題に飢ゑた小兒に歷史、宗教、伊太利、佛蘭西兩國語を教へた。彼の「教へ易き性質（ドシリテイ）」は特別賞讃すべきであつた。彼は知識の凡ての增進に非常の熱心を注ぐのでその要求が、母が課する物以上に及んだ。そこでイートンに入學させることになつた。その頃、彼を托されたことのあるブルックの牧師、コリンウツド・フオスター・フエンウイックは、この小兒の知識學問の深いのに舌をまいて愕いた。彼はその頃、小說を讀むことを許されてゐた。

イートン時代

一八四九年夏の始、スウインバーンは、イートンに入學した。年齢一二歳であつた。親は四月二四日學校へ彼を伴れて來た。そして、從兄弟のアルジヤナン・バトラム・ミトフアド（リデスデル）をして、世話をさせた。この人は、九歳の時からイートンに來てゐるので、イートンのことに精しかつた。

リデスデルが、スウインバーンが學校へ來た當時のことを記した文章中に、『兩親の間に立つて居た彼は、かよわく小さく、驚きの目を以て私を觀た。バウドラーの、シエークスピーヤを脇に持つてゐた。』『彼は至つて小さかつた、四肢は小さく優美で、斜になつて削いだやうな肩は、その大頭を支持するに弱過ぎて見えた。頭は右端に在る赤い、もつれ毛の、かたまりで一層大きく見えた。』『容貌は小さくして美しく、或る希臘彫刻の傑作のやうに優雅なものであつた。皮膚は至つて白いが、不健康な白色で無く、或薔薇の花瓣に見るやうに透き通つた赤みを帶びた白色で、顏は慈母に酷肖してゐた。母は最も上品で愛ら

しい。彼の赤毛は、父親側から來たものだ。私はアシバーナム家の方に赤毛のあることを聞かなかつた。』等の文辭がある。

六ケ月、若いジョウジ・ヤングは、彼によく接近した。『彼の髮は、赤、黑赤、輝く純金色の三種の異つた色と其等の構成より成る』と云つて居る。リデスデルもヤングも共に『彼は人を恍惚たらしめるやうな最も愛らしい小兒であつた』といつた。イートン學童とうちとけず、內氣で、はにかんでゐた。彼の小さい顏、髮の輝き、綠の眼などが人の目を引いた、肉體的の珍らしさがイートンの驚きであつた。そして彼は弱いものいじめから安全にあつた。彼には、威嚴もあつたが明らかに勇氣があつたのだ。彼の帽子は大きい事に於て校中第一であつたといふ。

或階段のやうなもので入ることの出來る一教室で、或曇り日に教師、クツケスリイが教へてゐる時、スウインバンは遲れて、そこに入らうとした。その顏が、階段の所へ輝いた時に、教師は、『そら、そこに、太陽が、昇つたよ』と云つたさうだ。

――四九年、彼の兩親は、彼を伴ひレークスに旅し、九月ライダル山に、老詩人ワーズワースを訪ねた。老詩人は禮節を以て彼等を歡迎し特に、一二歳の彼の訪問を大いに喜ん

だ。その面會後、六月にしてワーヅワースは死んだ。訃報を耳にしたスウインバーンは、『それは四月の日光を暗くした』と云つた。

彼がイートンに入つて以來の知識の進歩の顯著であることは誰も認めた。彼の母が『早熟兒には、赤ン坊の食料を長く與へてはならぬ』と云つたのは、よく子を知るもので、彼は他の學童と同樣に學校の課業を學んだ上に、童兒圖書館に入つて書物を耽讀した。彼はまた少年の餘り入らないカリッジ、ライブラリイにも始終通つた。マースタンの戯曲や、ジョンソンの「英國詩人の生活」や、ラムの「英國劇詩人の代表」、マッシンジャーや、フォードの作に早くから親しんだ。

彼は佛、伊のクラシックスを耽讀しその記憶は彊固で、引用の該博な事も人々を驚かせた學友等と散歩する時、彼は舞踏するやうな足ぶりで歩いた。彼は眼を熱情で輝かせ風に髪をふかせて、最近得た詩を吟ずることがあつた。その聲は聽くものに深い印象を與へた。友人は驚いて、宛ら他の世界の靈感を得てゐる妖精をでもみるやうに視た。彼は魔的魅力を運ぶ勇者で恐ろしいものを有たないやうであつた。彼は他の學童とともに遊戯をしなかつた、フットボールなども申譯的にやつただけでクリケット棒など一度も持たなかつた。

然し散歩と游泳は大いに好んだ。

イートンに四年半在つた間、學校に對する氣分に變化はあつたにしても、概して好感をもち、そこの傳說や武士氣質的記憶が彼の心に深く浸んだ。

イートンに於ける三年目に或る向上心の目覺めより、彼の精神的發展は、實に顯著であつた。——五二年には佛蘭西と伊太利語で、第二皇婿賞を得、希臘悲歌でも賞せられた。イートンで『根と枝』『グローリアナの勝利』その他多くの詩を作つた。

イートンにて彼は希臘の詩に就いて非常な知識を得た。勿論、原書を讀んだのだ。ラテンの詩人では、カテュラスを愛し、ホリスを厭つた。

彼は學校で、『神經袋』と云はれたほどで最少の故障も彼の安靜を失はせた。そんなに怒り易くあつたにしても、決して傲慢でなかつた。尊大ぶる事は、中年の或時期迄保たれたが、老年に失せたやうだ、少年時には見られなかつた。

イートン最後の—五三年には生徒として少し、從順を缺ぎ學業を怠つた。「狂スウインバーン」などと云はれもした。彼は幾分學校に對して叛く態度に出た。そして夏、イートンを去つた。

オクスフアード時代

イートンを去つてから、一八五六年一月二十四日、オクスフアードのベエリアル・カリッジに入るまで、約二年半の間、彼は、軍人にならうと望んで・多分一五四年の末に、父母に許しを乞うたが、父母は三日考へた後に、父から「汝は身體が弱く身長も短い」といふ理由で、その望みは蹂躙された。然し猶、望みを棄てなかつた、が耳が聞こえずなつてから斷念した。

オクスフアードに入る準備は、ノーサムバーランドのカムボの牧師補、ジョン・ウイルキンスンによつてなされた。然し此の賢い人は、あまりこの若者の怜悧過ぎるのを嘆き、勉强させるよりも、戸外に遊ばせるやうにした。乃ち彼はノーサムバーランド及びウエートの島で、馬に乘つたり、海岸に逍遙したり、從兄弟達と遊び廻つたりして、日を過した——五五年七月、彼は叔父、タマス・アシバーナム等の伴をして、はじめて、國外、獨逸に數週間在つた。その時も、その後も、獨逸語と獨逸文學に引付けられることが無かつ

た。オステンドから海で歸る途中、夜、その郵船が暴風に遭つた。その時の記憶はその後も彼の詩や文にあらはれた。

彼はワーヅワースのやうに不斷に自然と交渉しなかつたが、ある特別な稀な場合、一途にそれを恍惚として觀る、そしてそれを貯へてゐて、後日、復活させ誇張さへも加へた。彼は彼の周圍の世界を廣く見なかつたが見たものは生々と燃燒した。彼は又ジエムス・ラッスルに就いて敎へられた。

オクスフアード在學中、クロウフフードと親しくし、日曜には共に散歩した。飲酒の席や朝餐に出ず詩を作つてゐた。こゝでも、弱さうな少女のやうな姿、中以下の身長、殆んどそのせまい削がれたやうな肩に觸るやうな赤毛の大きな縮れ毛や、容貌の雅致は目立つたが顏に若者らしい新鮮が缺けてゐた。相變らず一種癖のある歩きぶりをした、實に美しい聲であり、態度、談論は、稍內氣遠慮勝ちて洗錬の魅力と好い表情を有つた。然し一般には漠然と、むつゝりの腹の中を見せない、英國々敎的禮儀を守る新入生とせられてゐた彼はこの學校に對して厭氣を持つてゐた。第二年目に大抵自分より年上の友人と交り初めた。エドウイン・ハツチがその友人に未來の詩人畫家として紹介した。スウインバーンは

リチヤード・ワツトスン・デツクスンや、スペンサー・スタンホープや、また、ジョン・ニカル、タマス・ヒル・グリン、マニユエルジョン・ジョンスン等と交つた。當時、オクスフアードにオールド、モータリテイ、ササイアテイ Old Mortality Society といふ會合團體がありその會員には最も適當な知的誤樂保養を提供するといふ目的で一週一度會合し互に論文や詩文の章句を讀むのであつた。それに屬した六人の創立者は非常に重んぜられたその六人はニカルズ、スウインバーンをはじめ、デイシイ、ジョージ・ランキン・ルーク、ジョージ・バークビク・ヒル、アルジヤナン・グリンフエルであつた。スウインバーンはブラウニングを愛讀したが、ラスキンの作も大いに賞讃した。その他英國の詩家の作を廣く讀み、佛、伊のものも目を通すので、彼等のグループ中、一頭角を拔くに至つた。

——五七年、一一月頃ロンドンに在つたウイリアム・モリスが、オクスフアードに來たハツチに依つて紹介された。又、ダンテ・ゲイブリアル・ロウゼッティやバーン・ジョンズに紹介された。スウインバーンは、既往に遇つた誰よりもロウゼッティを驚くべき人物と見た。そして當初からその心からの親切と非常な寛大とを喜んだ。然し、九年の年長者である事と、ロウゼッティの態度の立派さが、尊敬を拂はせた。三歳年長のモリスとの會話からは知的快樂の一新境を開いた。特に中古の佛蘭西のロマンスに導かれた。

——五七年八月スウインバンは、グラスゴーにニカルを訪ひ二人は、ブレヴェンの山嶺を極めた。後、ニカルがウエート島に來た時二人は、フアーリンフアードに、詩人、テニスンを詣ねた。テニスンはデンナーに招き、謙遜な聰明な若者としてスウインバーンを待遇し詩マウドを讀んでくれた。—五七年マシユー・アーノルドがオクスフアドの詩のプロフエサーとして任命されて來たので、その講義を聽いた。そしてカーライル崇拜でマシユーの希臘主義を貶すニカルに誘はれてアーノルドの講義に反感を有つた。

——五八年夏、ノーサムバーランドに在つた、そしてウオリングタンで、ウオルター・トリヴェリアン及び、その夫人のロウゼッティの友人でラスキンの賞讃者、レデー、トリヴェリアンを知りその紹介でラスキンを知つた。

復活祭休業の時に、父母とともに、ヴィクトル・ユーゴーの作を熱愛してゐる彼は、巴里に赴いた。この年彼は、ベンジヤミン・ジアイツトに近づいた。

——五九年になると、年長者の友人達、ロウゼツティ、バーン・ジョンズ、モリスは、ロンドンに歸り、ニカルは、スコツトランドに去り　ハツチ、スペンサー・スタンホープ等

は學位を取つて、大學を出たので彼を抑へる權威がなくなつた。彼は騷動好きになり、學生としてふさはしくなくなつた。學校から危險な者として視られるに至つた。彼は停學せられる處れがあつた。彼の嘲罵の豐饒は人の知る所であつた。惡評を負うて永久にオクスフアードを去つたのは――五九年一一月二一日であつた。

ロンドン生活

彼はオクスフアードを去つてから、九十八歳の曾祖父の居るノーサムバーランドに行つた。父は彼の學校に於ける失敗を憤り、今後、如何にする考へかと詰問して來た。彼はロンドンに出て、ペンを執つて生活したいと云つた。父は容易に許さなかつたが、――六〇年に、年額四〇〇磅程の學資を出すことになつた。乃ち彼はロンドンに走つた。

バーン・ジョンズに遭ひ、フランスから歸つたモリスに會ひ、ロウゼッティと見た。彼は熱心に詩を作つた。年齡より若く見え、奇妙に新鮮の感じと魅力とを有つたと謂はれる。詩を諳誦する時、有頂天な無意識な凝視に、その何とも云ひ表し難い美しい眼を上げた。その眼の清らかな綠色は褐色の睫毛で、やはらげられて、忘れ難い感じを與へたといふ。談話の豐饒と宏大とは聽くものをして驚嘆せしめた。然し、誰彼の別無く語るといふのではなかつた。

――六〇年、父母は、彼の兄弟と共に彼を佛國メントウニイに伴つて行つた。この土地

を厭つて家族に笑はれてゐた彼は翌年早々、はじめて伊太利に小旅行を試みた。ジェノア、チューリン、ミランを經てヴェニスに達したのだ。

ロンドンに歸つてから、舊友の畫家と懇意にしたそれらの中で、ロウゼッティが最も傑出してゐて、オクスファードに於けるニカルのやうな位置を占めた。彼は小兒らしいスウインバーンの守護的友人といふ有樣であつた。二人は前より知つては居たが、この年になつて友情は成熟したのであつた。ロウゼッティは『わが小さいノーサムブリアの友人』と親しく呼びならした。此ロウゼッティの彼に對する態度は、弱い弟に對する強い兄のそれであつた。或は勵まし、或は刺戟し勉强させた。然し、スウインバーンの一般的教育、文學的熱心、詩の知識は、ロウゼッティ以上であつたのだ。

彼は度々、モリス家を訪ねて、その夫人を崇拜に近いまで賞讃し、夫人もまた彼を高く評價して止まなかつた。

曾祖父は、―六〇年の九月ノーサムバーランドで九九歳で死んだ。その後そこに在つた彼は、レディ・トレヴェリアンと親しく交つた。一日ウオルター・トリヴェリアンが畫室に入つて來て、テーブルの上に佛蘭西の小說を置かれてゐるのを見て、夫人にこれはどうして

こゝに在るかと尋ねたので、アルジヤナンが持つて來たのだといふと、英國夫人に佛蘭西小說を推奬するはいけないと老紳士も妬みによつて罵詈を放つた。そして彼はその小說を火の中に投げ込んだ、スウインバーンは、堂々たる品位を保つてその家を出た。然し疎隔は永久でなく又彼等二人と舊交を回復した。彼はまたウイリアム・ベル・スコットをニューカツスルに訪ねた。

ロンドンで彼は、文學と政治方面に活動してゐるリチヤード・モンクタン・ミルンズと交つた。――六〇年クリスマスの前に二つの戲曲を含む『母后とロザマンド』Queen Mother and Rosamand を發行した。これはその當時不評判に終つた。彼の新らしい冒險が失敗に歸したので、彼は『世のあらゆる死產中、あれは最も沈靜なものであつた』と云つた、當時此の書の價値を認める批評家が一人として無かつたのは不思議であるが、多分、その最初の不緊張が續けて精讀する勇氣を奪つたものであらう。その頃の讀者には、不向きであつたかも知れないが、その作はチヤプマンやシエークスピヤーに近接したロマンテツクの復活であつた。彼は大膽に此の沒韻律詩（ブランクヴァース）の戲曲で、詩的ドラマの概念を改造しようとしたものであつたが、人を動かさないで終つた。

—六二年、二十六歳になる前に、眞面目に、生活を考へ出した。そしてこの飽く無き讀書子は文學上のあらゆる傑作に漸次親んで行つた。そして又、多くの讀者から無價値とせられた數多い書物から、妙所を引出した。彼はこゝ五年間、著作の大家に自らを徒弟(とてい)としてゐるやうなものであつた。そして假令、その寂しい刊行物が全く失敗に終り世間から冷遇された如くに見えても、屈せず、いよ〳〵大望を高めてゐたのだ。彼の詩は、この時推敲され、取捨され、改作されてゐた。詩劇「チエストラード」Chastelard なぞは—八年から六五年まで或は棄てらは或は拾はれ、種々に苦心されたものである。

その頃彼は人知れぬ戀路にさまよつてその失敗に苦悶した。彼はラスキンやバーン・ジョンズの多くの友人に紹介せられた。病理學者、ドクトルのジョン・サイマンとその妻ジェンを知つた。この夫人は、ラスキンが『ラフアエル前派同志婦人』と親み呼んだ女だ。夫妻は好んで詩人達の朋友仲間を歡迎した。彼、度々此の家庭を訪問してゐる間に、主人夫婦の親戚に當る若い婦人をそこに見初めて、その溫雅と快活に心を魅せられた。そして彼女も自分を思つてゐると見込んだ。彼女が薔薇を呉れたり、彈奏してくれたり、唱つてきかせたりして慰める行動を、戀愛の裏づける行動と想つた。そして一度、戀情を訴へたが、その動作が彼女には、沒常識的な亂暴なものに見えたので、その場で笑はれてしまつた。乃で心持惡く別れ、失望してノーサムバーランドに歸り、その地で、「時の勝利」The Triumph of Time を著した此の作は彼自身に關する作品中最も深刻にして感動力に富んだものである。その詩の中に、海について「人の大きい美しい母であり戀人である」と、比類無く海を愛した彼の脣から自然に流れ出たものとして好い句がある。唯、海に關してのみならず全篇を通じて詩の最奥的感じの革命として精密なる研究に價するものだ。そして彼がこの一少女に對する眞實さは彼の一生彼をしてこの記憶を忘れしめなかつた。

—六〇年五月にロウゼッティは、リツヾイ・シッダルと結婚した。この女は、スウインバーンと幼い時の友人であつたので、忽ち友情が濃かに湧き上つた。この二人は共に多くの赤金色の髪をもつてゐたのみならず、ほゞ、同程度に世間のことに經驗乏しくそは〳〵してゐて氣儘で遊び好きで、馬鹿ばかしい事をやる性僻なので、ロウゼッティは二人の無邪氣な交際に慰められてあつた。彼は始終彼の家を訪ひ、殆んど毎夕、三人で料理店で食事した。二月一〇日三人食事をしてロウゼッティが彼と家に歸り又出て歸つてみたら彼女は死んでゐた。死因は亞片丁幾を飲み過ぎたのであつた。妻の死後ロウゼッティは、この年少の友から慰安と

氣紛れを求めたので一層懇意になつた。その頃に至るまで彼は一の原稿も賣らず又新聞記者の意に從つて一の論文も書かなかつた。これは文學に從事するもの〻經歷中一奇であることを失はぬ。ロウゼッティが、マーテンに、『常識には缺けてゐるがテニスン又はブラウニングの後を繼ぐべき二三の指導者の一人たるべきもので立派な作を持つてゐるから公表の便宜を計つてくれよ』と云つた。スウインバーンにラフアエル前派の同輩以外公開の戸が開かれたのは彼の二六歳の時であつた。モンクタン・ミルンズの紹介で、リチヤード・ホールト・ハットンを知つた。後に新聞「スペクテーター」の有力な株主で有力な記者となつた手腕のある彼も若い詩人の知識とその確實な趣味に眩惑して、懇に彼の新聞に詩又は文章を書くことを勸誘した。乃で、彼の詩文は四月からあらはれはじめた。詩には、「フオーステン」「革命時の歌」「いしもち草」があり、長論文には、ユーゴーの、「此悲慘（レ・ミゼラブル）」やボオドレール「惡の花（レフロルドゥマル）」に關するものがあつた。

スウインバーンが、ボオドレールに「スペクテーター」に手紙をつけて贈つたが懶惰性によるのか、病氣によるのか、全一年返事がなかつた。スウインバーンはこの事を、ウイスラーに話したので、この人はボオドレールにその不敬をからかつた。ボオドレールは遂に、—六三年一〇月、最も興味ある手紙を書いて、ロンドンに行く友人に托した。然しこの人は、それを等閑に附し渡さなかつた、その手紙は後日封のまゝパリイの或所の或抽斗の中から發見された。このことは、彼を崇拜したスウインバーンには哀しいことであつた後、ボオドレールは「パリイに於けるワグナーとタンホイザー」の小册子を贈つた。—六七年四月ボオドレールの死が傳へらるゝやスウインバーンは、壯大な挽歌「會釋と別離」Ave atque Vale を作つた。然し實際ボオドレールはその年の八月三一日まで生きてゐた。然し、スウインバーンの特殊の技巧の輝いてゐる、「詩と俗謠」Poems and Ballads をば讀まなかつた。

—六二年、フイツジヤラルドのルバイヤツトの隱れたる美を發見し、ペルシヤの四行一節形が彼を魅した。そしてその形式をとり入れたが、オウマーカイアムの模倣で無く、彼自らの光を放つた。その頃、又、ホイットマンの『草の葉』を熱心に愛讀した。夏、晩年のウイリアム・サッカリイにフリスタンで面會した。サッカリイは二人の娘を伴つてゐた。娘達はスウインバーンを好んで、親しく談話を交し、またその詩の朗讀を聽いて感激した。殊に、詩人の親切と慰安を受けたリチイ孃は、彼等父子三人がフリスタンを去る時になつ

て今まで、スウインバーンのやうな心を魅惑する人物を見なかつたので、大變、離別を惜んで聲を上げて泣いたといふことである。後に「エリザベス物語」The Story of Elizabeth を著したのはこの婦人である。彼等の父が死ぬまで、稀に出會つたとは謂へ交際は持續した。

「スペクテーター」社は彼を急激革命主義者と誤解した。彼は正氣と合宜とが批評權能の二支柱であるとその社の擧措に對して怒つて云つた。そして亂暴記者は彼を連累者の中に入れてしまつた。そんなことなぞからして八年餘も彼はそこにペンを執らなかつた。

クリスマスには、いつもの慣例通り、ノーサムバーランドに歸りロンドンに出で—六三年の春にパリイに在つた、そこでホイスラーと親しくなり、英國に、ホイスラーが歸り、スウインバーンがシエルシーに住むやうになりホイスラーの母に愛せられた。ロウゼッティとホイスラーの親しい畫家のフレデリック・サンデイスとも交つた。この畫家の畫に對して詩「クレオパトラ」を書いた。

スウインバーンは健康を損じ時々病氣に惱んだそれは專ら、ロンドン生活の刺戟から來たとせられたが、病症は醫者によつて一定しなかつた。然しそれは癲癇的病狀で痙攣的發作を呈するので何か腦の昂奮の後に起るのが常であつた。突然ぶつ倒れて何にも知らぬのである。その病がホイスラーの所で起り、夫人が介抱した。ロンドンを去るがよからうといふことになつて、チンタゼルに彼の昂奮を沈めるに適當な沈靜な風景畫家インチボールドと長い夏を過した。それからウエート島に歸り、ニタンに從弟と暮した。—六四年の二月までに、不朽の名作、アタランタ、イン、カリドン Atalanta in Calydon が完成された—六三年妹のエジスが死んだ。ウエートに在る間、アタランタの外に從姉妹のメリーゴールダンと「チヤペルの子供」 The Children of the Chapel を合著し、又「歡樂の巡禮」The Pilgrimage of Pleasure なぞを書いた。—六四年の二月、ウエート島を去つて、伊太利に遊んでゐる家族と一緒になつた。ジエノアにしばらくあつて後、三月早々、フロレンスに入り有名な著述家ウオルター・サヴィジ・ランダー（その時九十歳）に面會した。そしてその赤毛の頭髪をふりたて膝を進めて、明らかに崇拜する旨を述べて老人の面前でその天福を祈つた。所が老人は、當惑らしく、何だか、不安な、氣味の惡い樣子をした。訪問者もそんなことなので不安な氣分で辭し去つた。然し再訪問の時には老人、前と變つて大いに彼の卓越を見せた。そして大いに喜びの情を表示し、今もこの後も、「親しい友人」と呼

びたいと云つた。

スウインバーンの魅力に動かされたランダーは、此の會合は記念せられねばならぬ、そこに吊してあるカレツジョの名畫を差上げると云ひ出した。其れでなくとも決して忘れないと云つたが再三再四貰つてくれといふ、それに及ばないと辭す、しまひには老人が、怒つた樣子迄して勸めるので默つて了つた、その繪は早速旅館まで贈り屆けられた。これは英國まで運ばれたが、その繪は老人の思ひ込んだほど價値ある繪でなく書き擲りで、果してその名畫家の筆跡かも疑はれた。

旅行中、シーモーア・カーカップと會談した。この人は、ブレエクの知己であり、キーツとも親交があり、その葬儀にも列した人であつた。フエツソレでは垣の高い花園に晝、夜鶯の聲によつて聾せむばかりであつた。そこで、イチラスを書いた。シーエナーに遊んで、伊太利中第一忘れられない都市だと云つた。

—六四年夏、ロンドンに歸つた。彼とメレデスとは、性質が合はないのでメレデスの七十回誕辰まで殆んど會ふことがなかつた。その誕生日前に書面で和解し、ボツクス、ヒルに招待された。その頃マウント街に下宿し後、ドーシイト街に移りそこに四五年在つた。

名作に對する攻擊と彼の反抗

一八六五年の初め『アタランタ・イン・カリドン』Atalanta in Calidon を完成した。四月に出版されると、彼の小さい仲間の間にばかりよく知られてゐた彼が、一躍して世間からその才能を認められた。彼の全著作中、これが最も愛讀された。抒情の文句が豐饒で、此の詩人の最も快いミーターをもつて、驚くべき創造性を顯してゐる。その物語は單純と雖も感動せしむる要素に滿ちたロマンテツクなもので、其の朗吟調(レシタティーブ)は無韻詩で作られてゐるそれはその清澄、氣品、樂曲に於て驚愕に價する。古代希臘に材を採つたもので、これに比較すべきは、前に、シエリの『プロミシユス、アンバウンド』Prometheus Unbound がある。由來、希臘古典劇を模して英國化せんとする努力は遠く、エリザベス女王の頃から、あつたが、希臘古典劇の莊重にして沈靜なるは、活動的な、エリザベス女王時代の人々の好尙に合しなかつた。それ故に、多くの試みも失敗した。十九世紀になつて、シエリも大低同樣の試みをやつたと謂へるが彼のは、希臘古典劇の法則を殆んど破つてしまつたのだ。それに比して、スウインバーンのは、英文學としての價値が優秀であり、古典劇の理

想にも比較的近い。此の運命悲劇中に、ところ〳〵合唱（コーラス）が入れてある。これは彼の詩中、美しい抒情詩の上位たるべき値を失はない。實に彼は英國詩人の誰よりも古代の詩に浸つた。ミルトンも、ランダアも、彼にはその點に於て遜色があらう。そしてアタランタの整つた形式の上からもその組織の優れてゐることを觀ねばならぬ。それはその當時大いに賞讃されてあつた抒情的とは謂へ實質的非演劇的戲曲の痙攣的型に對する反抗であつた。彼は毅然として、故意にその惑溺に對戰したのだ。なほ又、彼は他の作家が古い物語の外形に囚はれてゐる間に、改新も施した。

この書を讀んだ誰も驚愕し賞揚し批評家も揃つて無比の大詩人と彼を揚げることを競ひアタランタ中のコーラスの耳に快きことは、英詩人中、右に出るものがないとした。隨つて—六五年はこの若い詩人が、諸方面に顏を出すことが繁く都會にある時日が多かつた。刺戟の多い都會より田舍に在ることを勸める友人もあるので、父が自分等の新住地として選んだホウムウッドに移つた。その家は極めて見えを張らない住み心地のよい借家だつた。

彼はまた十八世紀末以前に產れた老詩人でキーツやハントの時、名高かつたウオラー・プロタターに遭つた。この老詩人も若い詩人に魅せられて、夫人を紹介し親交を結んだが—七四年逝いた。—六五年七月、『チエストラード』即ち『シヤートラー』が出た。其劇的進行とスタイルの親しみ易さは一九世紀の詩中、ユニークである。そして舞臺の上に輕快の効を擧げるものだ。彼は晩夏を、ホートン（モンクタン・ミルンズ）とフリスタンに過した。彼はリチヤード・バートンと知合ひになつた。二人は睦まじく頻繁に、バートン夫人の父のジョージ・バードの家で會つた。この年に、また、ジョジフ・ナイトと交つた。

アトランタの大成功、チエストラードの評判からして、彼の友人は彼の詩の出版の大いに歡迎せらるべきを思つた。時々、スウインバーンは、或畫家の研究室で、彼を崇拜する半圓形の人々に對して、感動を以て震ひつゝ「イティラス」其他を諳誦した。聽衆はその一諳誦の終る頃には、我を忘れて座を乘り出してゐた。特にラフアエル前派の淑女達は、曾て、その白い手で月桂冠を投げて、詩人の縮れ毛の頭に、調和よく輝かせた。ロウゼッティはこの神聖視する私の儀式をいまいましく思ひ堂々と戰ふ態度を切望した。

當時テニスンは、詩人の典型の如くに、一般から見られてゐた。ロバト・ブラウニング

はその詩風に靡かず、「環と卷」 The Ring and the Book に長い力を注ぎ、アーノルドは散文に努め、フイリステアも勢を占めて居つた。その外、ダンテ・ロウゼッティ及びクリステイナ・ロウゼッティ、ウイスラー、メレデス、等各々その繪畫又は詩文に才能を發揮してゐた。

—六五年一二月、ラスキンがスウインバーンをドーシイト街に訪ひ、詩人が出版せんと欲してゐる詩の大部分を讀んで意見を求めたのに對しラスキンは大いに贊し、發行を勸めた。トリヴィリアン女史またその詩集發刊を大いに勸めた。詩人は、母音長短、韻律、拍節脚韻に關しては、確信する所がある、知人或は批評家が何といつても構はないといふ態度を取つた。

テニスンと彼とは、一度、食事をともにしたことがある。テニスンはその頃「甚だ、謙遜な聰明な若者」と評してゐた。アトランタを讀み、「長い間、こんなに美いものを見なかつた」と書いた。—六五年一二月「詩と俗謠」 Poems and Ballads の原稿を集めた際、彼月桂冠詩宗が、たま〳〵、ロンドンに來た。パルグレーヴが、盛名一世を壓するテニスンに面會するやうに、スウインバーンを誘つてくれとホートンに求めた。面會した兩詩人の間には、慇懃な言葉が交されたが、それだけで、何事も他の言葉が交されなかつた。スウインバーンは、ジョージ、ヘンリイ、リウーイズと別室に退き、ブレエクやフラクスマンに就いて、つくり聲めいた音聲をあげて獨語した。スウインバーンは非常に昂奮してゐてホートンを憤らしてしまつた。ホートンは彼を伴れ歸り、年長にして優れたもの〻前に於ける態度に關して忠告した。忠言が容れられず、二人の間の友情は冷かになつた。

この出來事は彼の性質を表はしたものであつて、かやうなことはまた繰返される虞れをもつものであつた。彼は一般の社會に不適合であつた。彼は衆人の前、殊に珍客の面前では、氣を揉む上に、自分の中に起つて來る頭腦に一杯になる文學、技術の問題の感激の潮に抵抗することを得ず、聲を亂し、手足の關節が外れるおもひがするのだ。

—六六年、醫者のジョージ・バードと知り、その家族姉妹とも深く交り、ウエルベク街の家に絶えず訪問した。或年、彼の家族のものは、スウインバーンの所在が不明になつたので、大いに氣遣つて父親はホウムウッドを出て心當りを探し、バードに、子の所在をたづねたことがある。その時に、バード孃に「神はあの子に天才を與へてくれたが、自制を與へて呉れぬ」と云つた。—六六年一月、小冊子、ヴィーナス禮讃 Laus Veneris が僅かの部數をモクスンによつて發兌された。「詩と俗謠」 Poems and Ballads はこの年の夏に發行さ

れたが、その書物のまだ書店に出ない前から、新聞紙によつて、攻撃惡罵された。この集には、大學在學中の作品も多く、玉石混淆の嫌ひがあつた上に、革命的思想が、激烈の文辭となつて現はれて居り、肉感的刺戟的のものが一般の反感を買つたのだ。然し、彼に味方するものもありて、一時、大いに世論を沸騰させた。「反道德」であるとせられたことはその當時ばかりではなく、シエリや、バイロン同樣に、冷遇され、幾年經つても、彼の詩は教科書又は、詩華集に入れられなかつた。それは彼の詩が、意味深重で甚しく難解であるのも一つの理由であるとしても、反道德的であるといふのが彼を厭忌せしめたことは疑ふ餘地がないほど明かだ。彼は世の道德的に事物を判斷しなかつた、彼は審美學上の概念に立脚してゐたのです。彼は時流に反抗して獨自の境地に毅然として立つたのである。それ故彼はホイツトマンを攻擊するものゝ中に大いに讃美の聲を揚げ、ボオドレイルに向つても同樣の態度に出で、又、リチヤード・フランシス・バートンが、「アラビヤンナイト」の從來、英、佛、兩國に於て飜譯しなかつた猥褻な句をも遠慮せず譯した勇氣を、その攻擊の盛んな中に賞めた如き、それを證するものである。

「詩と俗謠」に對する世間の攻擊罵詈に對し辯駁文「詩と批評に就いて」Notes on Poems and Reviews を公にした。これは彼の論爭文の最初のもので、最も新鮮で最も元氣に滿ちたものである。少しも云ひわけらしい所は無く憤怒した傲岸なる若者の不正と僭越に對する昂然たる抗議である。これは大いに人を動搖させた。

—六六年の冬、彼は、テニスンの若い時以來未だ觀ざる詩の天才であると詩の愛好者から崇拜され、オクスフアードの學生は優越なる批評家と仰ぎ、ケイムブリツジの若い人達は手をつないで、「彼の革命の歌」を高唱するほどの人氣であつた。それのみならず、亞米利加でも、彼の「詩と俗謠」が出版せられた。又、一方では彼の詩に對する非難攻擊は猛烈であつた。

共和政治に對する熱情と『日の出前の歌』

スウインバーンの政治的熱望と、時折の政治的詩は、マッシーニーの計畫した共和政治に傾いた。そして彼の注目する所となり、―六七年の三月には、彼より手紙を得た。カール・ブラインドの紹介で詩人は彼の所を訪ひ優遇された。四月、ボオトレールの死を聞いて作つた Ave Atque Vale は彼の詩中光彩を放つてゐるもので、或詩家の如きは、彼のこの一詩だけにして彼は偉大なる詩人の資格を要求するに足るだらうとまで云つた。これは趣味傾向を有する詩人の死を衷心より悲しみ悼み又、賞讃の聲を禁ずる能はずして發したもので思想は幽邃、詩情は豐富曲調は整順、まことに得易からざる佳篇である。これは所謂英國五大哀吟、即ちミルトンが友人エドワード・キングの死を悼んだリシダス Lycidas 又シエリがキーツの死に對する哀歌アドネイス Adonais アーノルドが友人クララを悼んだサーシス Thyrsis テニスンがハラムを懷つたインメモリアム In Memoriam の第一に位するとまで賞められたものである。

―六七年七月、ホートンの家で多數と食車中、また例の病氣が襲つて來たので、友人が父に打電し父が驚いて來た、そして回復後ホウムウッドにつれ歸つた。この時の發病は餘程危險なものであつたと云はれる。ホウムウッドに數ケ月靜養した病の快復後は、時々共和政治に關する詩を作つた。秋、「伊太利の歌」A Song of Italy が出版された。これもまた物議を醸した。後「英吉利に訴ふ」Appeal to England といふパムフレットを出した。これまた新聞雜誌の批評家を怒らしたと雖も、明白簡素にして功果を擧げた政治詩であつた。――六八年の初めの數月は、「日の出前の歌」Songs before Sunrise に收められる詩に熱中してゐた。四月、「タイリイシアス」Tiresias を書き、六月、『シイナ』Siena を出版した。その頃彼の智能は全盛であつた。思想は華美な衣服に包まれ想像は輝く面被(ヴェール)を附け、政治運動に對して命令を保持してゐたのだ。七月、英國博物館の讀書室でまた例の病氣が發作して倒れ、机(デスク)の鐵釘で額に淺い疵を負つた。後、佛のエトルターに近い所の村里にゐる知人の所に在つて、海に浴し溺れんとして、救助されたことがあつた。その時、まだ二十歳未滿の少年であつた所のモオパッサンが、詩人の世話を申出で、許されたといふ。さればこの少年は當時のスウインバーンの面貌や態度を深く印象した、なほ又、オファンバークも訪ねてこの村へ來たといふ。

エトルターから英國に歸つて、五年間手許においた大きな著述、ウィリアム・ブレエク William Blake を出版した。これはあの幽玄神秘な畫家詩人について實によく評論しよく記述した尊ぶべき著作である。年末、コールリッヂの詩抄 Selection from Coleridge を出版した。—六九年の春、ドーシイト街から、ベッドファード、スクエア、ノースクレセント一二番に移つた。この頃の彼には、多くの作物が無かつた。ユーゴーを熱愛する彼とユーゴーとの間には、屢々書面の往復があつた。そしてユーゴーから彼の住所を訪問しないかとの案内狀を得たので歡喜して佛蘭西に行つたが、その時には面會し得なかつた。

「日の出前の歌」は——七一年春に出版された。彼は「他の我が書物は、書物であるが、日の出前の歌は私自身だ」と云つたほど、これには精神と努力を傾注したものである。アリス・バード嬢は、その兄弟の家に、詩人が、その第一刷を持つて來て、嬢等に對して讀みつゝ歌つてゐたが、感興が湧いて來て、室内を踊り廻り、ことにナポレオン三世を罵つた所になると、手を拍ち、感激に滿ちた聲を揚げつゝ全く別人の如くになつゐたが、その旋律の嵐が終ると、詩を放棄して、ソファにうづまり、平生の柔らかい聲調に復つたといつてゐる。「この日の出前の歌」は、その技量の進歩を示すもので、共和的思想の光輝、形式、修辭、韻律、皆整つたものとして激賞された。この前年に「佛蘭西、共和政治の宣言歌」The Ode on the Proclamation of the Republic を發表した。これは詩人の大なる努力に成るものでもなく又、これが表はれた頃、世間は、文學よりも、戰爭に心を奪はれてゐた際とて大きい反響は無かつた。

詩人は、伊太利革命の夢に耽溺したとは雖もその夢の影には、高く且つ重要な或物が潛在してゐた。詩人の「日の出前の歌」に於ける抒情詩の本體に於ける智的性質は賞讃に價するものであり、その獨創的なことは古希臘以來、無比であるのだ。

彼は、共和政治を、たゞ民主的政府の便宜な方法としてのみ考へず、最も高く發達した社會活動に於ける自由の實現具體であるとした。これは一般の衆俗、流行詩の讀者には解し難くとも哲學的に進歩してる教導者達は、尊敬を以て認めないでは居ないであらう。クリッファード教授は、特に、その著述に於て、哲學者が詩人達に訴へる不平はスウインバーンに於ては見ないでよいとし巧妙な筆致でその卓絶を賞めて居る。この英國文學中無比の位置を占める「日の出前の歌」には、詩人の神の前に於ける又、世界の永久性に於ける

高尚な感動が現はれてゐる。この點は恐らく、紀元前第五世紀の希臘の宇宙學的聖歌以來比肩する物はないだらう。ユーゴーの詩形の模倣だと論難した者もあるが、あれほどあの詩人を崇拜してゐたのであるから、自然、あの詩にあらはれたほどの影響はあるものであらう。ユーゴーのレ・クオートル・ヴァン・ド・レスプリ Les Quatre Vents de L'esprit の或部分の如きは「日の出前の歌」より十年後に出たもので、日の出前の歌に酷似して居る、似てゐるといふ點を以て攻擊すべくんば、ユーゴーも、スウインバーンを模倣したものとの誹を免かれまい。

獨立自恃、ペンに親しむ

スウインバーンは、過去一八六四年に於て、藝術倶樂部 The Art Club の一員に選ばれたその會員には、彼の親友の多くが屬してゐた。詩人のロンドン生活は極めて整然たるもので、大抵毎日の大部分クラブで、手紙を書いたり、友人と談笑したり、時折、珍客に接待したりしてゐた。彼の單調に過ぎる生活にクラブは、日々の變化を催す要素で健康上にも好適なものであつた。然るに不幸にも、——七〇年夏、クラブに大いに關係ある事件で、委員と爭つて、會員たることをやめた。普通の活動家には、これほどの事は一些事として心にも留めないものに屬するのであらうが、詩人は、取扱が苛酷でありとし、その中に或疑惑を挾み、怨恨をも抱いた。その結果、彼はその後、一般の公私の團體結社の役員候補者たることを辭し孤立するに至つた。そして人を魅する愛嬌と小兒らしい快活は失はないと雖も、何だか底に疑惑を抱き、不機嫌な所も潜み、齒に衣着せた議論をしかける傾向を帶ぶるに至つた。

彼の行狀はロンドンと田舍とで全く相違を來した。「日の出前の歌」の出版以前から彼は

引續いてスコットの女王、メリーの事蹟を戲曲にすることに努力した。それが、ボスウエル B.thwell となつた。—七一年初夏、度外れの行動が彼の健康を害したので、ホートンが父に知らせ、父が出て來てホウムウッドへ伴れ歸つた。回復後六月、オックスフアードに出でそこに來てゐた、ヘンリイ・ティンに面會した。又其頃ウオルター・ペーターにも面會して直ちに懇意になつた。エクザタアカリッジで、バイウオター及び、ジョーイットに面會し後者と共に、ピトロクリーに赴き、その地を愛した。八月ブラウニングが意氣揚々として彼を訪ねた。スウインバーンは彼の新しい詩を讀み、ハーキュリーズの所を最も美しいと思つたが、その主觀の哀感が單純で彼の分析的方法の爲めに、あからさまに過ぎると感じた。ジョーイットの、すゝめる儘に、そこから主に徒歩で、グリンコオ、インバネス、トリドンの方へ旅行をした。この旅行は、ノックスボックの詩人の伯父、ヘンリイ、バーシイ、ゴードンの家で終りを告げた。こゝに半年を費して父にホウムウッドへつれられた。

ボスウエル發行前の三四年は彼の生活中、前にも後にも違つた時代で、彼は公會の席などへは殆んど姿を見せなかつた、そして彼の驚くべき生産力を停止したかに觀えた。然しこれはたゞ外見上のことで、それらの年の間熱心に餘生の事業の準備に從つて居り、シエークスピヤーや、イースキラスの、技巧の秘密を獲ようとの量見を持つた。彼は又その多くの形式について試みた。彼は、英佛文學に飽滿しようとそれに身を浸した。殊に—七二年は少年時代に計畫したチヤールズ・ラムの批評の著述を繼承し整理しようとし、又、目的を達しなかつたが、フアーニヴエールにシリル・ターニューアの著作を發行せしめようとした。且、熱心にジョン・フオードの研究にかゝつた。—七二年一〇月、テオフィル・ゴオティエが死んだ。この佛文豪の作品中特に「モーパンの娘」Mademoiselle de Maupin の序文から影響を受けたと謂はれる。

—七三年亞米利加のエマスンが娘とともに英國及びエジプトを訪ねた。彼がコンコードに歸つてから亞米利加の新聞に書いた文章に英國の或人々を惡評した。特にスウインバーンは謀叛家として擧げられてあつた。それを手にしてスウインバーンは穩でなかつた。それ故、エマスンに宛てゝ、それは全く不當であることを確信を以て陳述し返翰を求めた。その書翰たるや禮儀を具へて條理あるものであつたが、エマスンは病氣のためであつたか返事をしなかつた。乃でスウインバーンは、傲慢にして徒に人を中傷するものとして憤慨し第二の書面を發したが、依然として返事が無かつたので、彼は、ラテン、エピグラムに

エマスンの人物性質に就いて非難し意氣揚々とそれを友人に見せびらかしたといふ。その頃、彼は鋭い癖癖のの情態に在つたと見え、カアライルに對しても、傲慢な表示をした。友情もやゝ冷かになり、ロウゼッティ、モリス、バーン・ジョンズなどとも往來すること少くたゞ僅に、ホートンと時々會ふに止まつた。然し相も變らず、ジョーイットは彼と睦じかつた。

—七二年、ハンテングダンシヤイアに住んでゐる辯護士シヤードーアー・ワッツ（—九六年よりワッツ・ダントン）が、ロンドンに出て平生熱心に注目してゐる、ラファエル前派の人々に會はうとした。そして苦もなくロウゼッティとモリスとに、懇意となつたが、スウインバーンは、容易に親しまなかつた。ところが年末に、マドックス・ブラウンが、ハウエルの罪惡を耳にし、その事件を、ワッツに委任せよと詩人に說いた。翌年の秋、詩人はグレート、ゼームス街三に移り、こゝに—七九年永久にロンドンを去るまで在つた。詩人は往時の責務について、その頃、ロンドンに移民したワッツに委任した。ワッツは彼と彼の前の代理人の失策について出版者間の調和に努力した。

『ボスウエル』は、—七一年大計畫で立案され其後中絶してゐたが、—七三年には、全くこれに勢力を傾注した。—七四年六月頃、この大戯曲が世に出るや、批評家によつて大好評を得たのみならず一般からは、「詩と俗謠」以來の何よりも歡迎された。

年末に、「ジョオジ・チヤプマン」George Chapman といふ批評論文を出版した。このエリザベス時代及びジエムス一世時代の戯曲の完全なる研究をなさうとの意見の論文は立派なものであつた。彼は、死ぬる少しまへまでこの意見を持つてゐた。—七五年ジョーイットとウエスト、マルバンのアシフイールドハウスに在つた。翌年五月ジョン・ニカルと英吉利海峽中の、ガージー及びサーク島に遊び、大いにそこの生活を愛し、六月ロンドンに歸るや、幾多の詩を產んだ。健康を害し—七七年春までホウムウォドに在つた。—七七年三月四日父が死んだ。詩人は葬式に少し後れてホウムウッドに歸つた。ロンドンに出てから『シヤアラット、ブロンテに就いて』Note on Charlotte Bronte を完成した。これは、癪に障るジョージ・エリオットの好評を薄弱にしようとの意志も交つてゐた。

—七八年五月、ヴィクトル・ユーゴーが、ヴォルテールの百年祭に、英國詩人の公然の代表としてパリイに來たまへとの招待狀を發した。然しその際スウインバーンは、甚だ惱み哀へてゐたので參加しなかつた。後また、彼を招き樂人が彼の詩を公衆の前に唱ひ、大學生

が彼の頭上に冠を置くといふやうなことをほのめかした招待狀がきたが彼は、そんなことに動かなかつた。—七八年六月第二の『詩と俗謠』が出た。この詩卷中には、彼の最も洗練されたメロディを以て人を全く魅了し恍惚たらしむる魔的佳篇が多く收められてある。この年、社交場に於て彼に紹介してくれとホートンに願つた所のオスカー・ワイルドを見たがスウインバーンは、彼を無害な一青年として會見したに過ぎなかつた。

パインズ、パトニイに於ける生活

——七九年九月に、シャードーアー・ワッツ等は、病氣のスウインバーンを、パトニイのワッツの別莊に移した。十月の半頃までは、手紙も書けないほどの重症であつた。その頃から、少しの散歩や文學上の爲事、手紙などを書き初めた。ワッツが總て事務的な面倒な事には與つた。詩人のこのパインズ、パトニイに於ける毎日は、秩序整然たるものであつた。朝早起きでは無かつたが、晴雨にかゝはらず必ず長い散歩をした。大抵一直線にパトニイヒルを起えヒースに行くが時には、リチマンド道に添うてマートリイク、アームスに出でバーンズコマンに至りなほバーンズグリンそしてチヤーチにまで行くこともあつた。リッジウエルとウインブルドンへの大道との角にあるフロースト夫人の店で始終、新聞や書物を求めた。雨が降らうが嵐が吹かうが常に傘を用ひず、帽子から赤毛を見せて歩き、日中のランチ又はデンナー前に歸る。二時三〇分になると、晝寢をやり、四時三〇分未だ起きて來ないこともある。その後少し歩き廻る、午後は書齋で、一〇分ばかり歩いては五分ほど

書き又歩きはじめる。書かなければ讀書する。夜になると音讀する。ダントンは、屢デキンズのものを朗讀するのを聞いた。

——八〇年早々、「シェクスピヤー研究」A Study of Shakespeare を發行した。其の頃も、前年からシェクスピヤーについて爭つた所のファーニヴァルと烈しい論爭をやつた。一八〇年一月、抒情詩集ソングス、オブ、ザ、スプリングタイドス Songs of the Spring tides を出版した。これは、三つの長い高調抒情詩と、ユーゴー、の七十八歳の祝頌とから成立してゐる。これもスタディス、イン、ソングス Studies in songs も世間からは、冷遇された。

——八一年、彼は、チェストラードと、ボスウエルとで三つ組（トリロジイ）を成す所の、メリイ・スチユアトにペンを進めてクリスマス前に發行した。そして批評家と一般の冷淡に失望した。新しいエンサイクロピイデイヤ、ブリタニカの記者から女王メリイについて書くやうにと頼まれたのはその頃のことであつた。「トリストラム、オブ、ライオネス」 Tristram of Lyonesse をも書き初めた。これが出版前に、彼のトリストラムを、敬愛したワッツでさへも二篇、四篇の戀愛的部分よりして、——六六年に受けた誹謗をまた受けることは無いかと恐れを抱いた。そこで二〇〇頁ばかり種々な抒情詩で半ば蔽はれて、部厚な書物となつて現はれた。彼はワッツの發議には大抵、異見を立てないで從つてそのするまゝに任せたものゝ、苦笑をば禁じ能はなかつたゞらう。發行されたのは——八二年七月であつた。此の書の序幕（プレルード）の成功は、シェリの、Epipsychidion のそれを以て比較さるべきものである。トリストラムが著者の手をはなれるや否や、ワッツは著者を伴ひジャンジイ及び、サークに遊んだ。

——八二年秋、ユーゴーからパリに招かれた。佛蘭西文學を好み、特にユーゴーの作品を好んだ彼は、ユーゴーの Le Roi s'amuse の演劇を觀ようと、ワッツと十一月パリに行つた。スウインバーンは、ユーゴーの作品を談る時には、しば〳〵佛蘭西語を不知不識の間に用ひたといふ。彼は佛語には通曉してゐたので、それを用ひて詩や散文を書いてゐる。

ユーゴー家へ度々出入するトラ・トリアンといふ女がスウインバーンの通譯をすることになづてゐた。

スウインバーンが、ユーゴー家の饗宴に同家を訪ねる日は至つて寒かつた。近來いよいよ耳が遠くなつて一層氣分が、いらだゝしくむしやくしやして此の日頭痛のして居るユー

ゴーと、齒痛で同伴しないワッツの許へ、早く歸つてやりたいと、せか〳〵して來たスウインバーンとの會見が滑に行けばよいがと、トラ●ドリアンが心配してゐた。英國詩人も耳が遠いのであつた。

スウインバーンは、東洋的誇張の言辭で、ユーゴー先生は、宛も群星に圍まれてゐる太陽の如しといふ樣な讃辭を述べた。ユーゴーは頭を前に出し、耳に手を翳して威赫するやうな表情で、聽き取らうとし、「彼は何をいつてるのか」といふ風をした。聞こえてゐるゐないに一向構はないで、スウイバーンは喋り續けた。乃で、ドリアンが中に入つて通譯の勞をとつた。

デザートになつて、主人は客人のために、杯を擧げた。乃で英詩人は主人公のために乾杯すると、杯（グラス）を高く揭け、空杯を肩越しに投げた。ユーゴーはその動作の意味がよく了解されないので、たゞ碎かれた杯に對し、「よい杯だつた……」と惜んださうだ。

スウインバーンは、あまり廣汎にあまり流暢に、疾驅的に書き流すことを避けて、鍛錬しようと、一六世紀佛蘭西の詩人マーローの、はじめた、循環句法詩 Rondeau に倣ひ、英國風に、それをランドルズ Roundels と稱へて試みたが、それは歡迎せられなかつた。

彼はこれらの小詩一百を輯めて出版し、――八三年の春、以前から愛してゐる友人、クリステイーナ●ロウゼッティ女史にデジケートした。これに幼兒賞讃の感情が彼の最高頂に達してゐることゝ韻律形式の整頓とが觀取される。

――八三年、ニューランズ、エマラルド、バンクに、ジョーイットを訪ねた。抒情詩集、「盛夏の休日」A Midsummer Holiday を出したのは八四年で、翌年、伊太利の自由に關する沒韻律語の戲曲、「マリノ●フアリイエロ」Marino Faliero を翌年、ヴクトル●ユーゴー研究 Study of Victor Hugo 及びロツクライン Lockrine を出版した。後者は非常に注目に價するもので、脚韻（ライム）の巧緻な布置で書かれて居る。これは――九九年に、或劇協會に於て實演せられ、文學的觀衆を樂しませ心を動かせた。他の劇曲は皆彼の生前には上場されなかつた。

――七九年に、パトニイに移つてからスウインバーンと、ロンドンの藝術家との交渉は絶えた形であつた。而して、彼に比して、實行的で、氣力の旺盛なワッツ●ダントンとの親交は深くなり、詩人は、ワッツを通じて他と交渉を持つといふやうな有樣であつた。こゝに移つて來てから、五六年間は、日中にロンドンへ時々友人を訪ねたが、耳がいよ〳〵遠

くなつてからは、それもやめた。ワッツと親交のあるウイリアム●モリスは、屢、二人から歡迎された。ジョーイットも同様であつた。但し前者は、スウインバーンと會ふことは稀になつた。不健康によつて、クリステイナ及ひゲイブリアル●ロウゼッティとも、疎遠になつた。さうしてゐる間に次々に死んでしまつた。ゲイブリアルは――八二年に、ロオド、ホートンは八五年に、ヘンリ●テイラーは、――八六年に、インチボールドは――八八年に、九〇年にバートン――九三年に、ジョーイット及び、マドクス●ブラウン、――九四年にクリステイナ●ロウゼッテイ、及びジョン●ニカル――九六年に、ウイリアム●モリス――九八年にイライザ●リン●リンタン及び、エドワード●バーンジョンズが死に、スウインバーンはラフアエル前派時代の友人では、長く疎遠である、ジョオジ●メレデスを除いては生存するものが無くなつた。然しジョオジの、七十歳の誕辰に、エドマンド●ゴスが、スウインバーンに手紙をかゝせて再び、友情が甦つた。

パトニイに於ける彼の感情の空疎は、ワッツの注意深い精勵倦まざる友誼と、又こゝに移つてから彼れを知つた若い男女からの愛情の籠つた敬意によつて滿された。それらの訪問人は詩人から與へられる歡迎を喜んだ。然し、時間を嚴守する彼は、待たせて後に會つたワッツは、時を定めて顔を見せた。

――九二年の戯曲、「姉妹」The Sisters を出した。これには詩人の小兒時代の想ひ出が盛られてある。十月、テニスンが死んだ。乃ちそのあとに桂冠詩人として推さるべきはスウインバーンを措いてまた人が無いとせちれてゐた。然るに、グラッドストンは、この詩人の政治的意見を慓悍とし、殊に或る外國の有力なものに敬意を拂ふ彼に月桂冠を與へることは議するまでもなく不可であると思つたので、長い中絶の後、その位置は平凡の詩人、アルフリド●アウステンに與へられた。スウインバーンは此の問題については、沈默を守つた。

――九五年の夏、小兒時代の思ひ出、ノーサムバーランド人の親しい面貌を戀しがつて「バレン物語」The Tale of Balen を書き起した。これは、トリストラムを除いて、最も長い物語詩で、著しい完成品で、彼の晩年二十年間の最傑作と云ふべきであらう。この書はモリスに贈られたが、モリスは病氣で一瞥を與へたゞけで、――九六年十月死んだ。この書を、想ひ出の中で、最も最初の人である母親にデジケートした。――九六年の七月一九日、母の八七の誕生日にはやさしい短詩を贈つて喜ばせたが、一一月二六日には、世

を去つたので、詩人は非常に悲哀の情に塞がれ、これが彼の死を早める因をなしたとも傳へられる。久しく若い時代と異り溫和になつた詩人は彼の母の死後、一層、物靜かに、世俗と遠ざかり、人を非難することをしなくなつた。

彼の規則正しい生活は彼の健康を保つたが、一九〇三年の一一月、雨中を長く歩いたので惡寒を覺え、肺炎になり一時危險に陥つたが、幸に、生き延びた。然し、以來、肺が弱くなつた。

然れどもなほ六年間、生存し、――四年に、抒情詩集「船路」A Channel Passage を翌年小說「戀の橫潮」Love's Cross-Current を出した。（これは二十九年前に書かれたものであつた）――八年に、「ガンデアの公爵」The Duke of Gandia を出版した彼の死の前、二週間は何の變りもなかつた。訪問者のジェムス・フイトスモオリス・ケリは、常の長い散步から歸つた彼は勞れては見えたが、病氣では無く、ランチの後、彼の書齋へ誘つてくれた。有名な文學者の書齋は豫期したほどの書物は無かつた。然し主人は、エリザベス時代や、ジヤコビアン時代の戲曲集を示した。そして又、書架に在る。甚しく損じてゐるユーゴーの書物について、製本屋に托す間も、離れて居たくないと言つたことを記して居る。

――九年の、復活祭の頃、このパインズ、パトニイ丘を、流行性感冒か襲ひ、ダントンがそれに罹つた。スウインバーンはダントン夫人、クララに、ランチの時、「ウオルターはどうした？」と尋ねたので、感冒で寢てゐると告げると、驚きと失望の顏色をして、オヤ、ぢやランチの後に見舞はうと云ひ、その言の通り、いつもの晝寢の前に、ワッツの寢室を訪ねた。それから自分の寢室で一睡して後またアイヴァンホーを携へて來て前の讀み續きをワッツの寢床に添うた席を占め讀んで聽かせようとした。ワッツは、スウインバーンにかく近接して半時間も讀まれては、自分の病氣の感染する無きかを恐れ、明朝まで延期してくれたまへといふと、ぢや奧さんお聽き下さいと云つた。病人は、その親切は妻も喜ぶが醫者の注意によつて、私に接近してゐなければならないので、たゞ話の筋だけ話してくれと云つた。詩人は、その意を知り、悲しさうに友人の病狀を氣遣ひ、室を出た。そして夕刊新聞を手に持つて歸つて來るや、ワッツ夫妻に知らせねばならない記事が載つてゐるといつて病室を訪ね、それを讀んだ。

翌日、天候が恐いので、病人が夫人を詩人の所に遣り、もしまだ散步に出てゐないなら

ば、こんな日に長い歩行はいけないと云はせようとしたが、夫人の行く前に出てゐた。詩人は常に外套を着けずに出るのであつた。

詩人が歸つて來て階段を上る時に、平生階段を蹴る癖を知つてる夫妻は直ちに感づき、ワッツの秘書、エドマンド●ヘイクを遣つて、早く衣服を換へるやうに云はせた。すると詩人は戸口で濡れてはゐるが元氣な顏を現した。雨中の散歩の方が彼には興味があつたからだ。浮き浮きくとして見えるので、ワッツは、こんな日に濡れて歩くとその爲め死ぬる事があると忠告した彼は、この忠告に耳を傾けるらしくも見えなかつたが、彼は風邪に罹つてゐた。後、ワッツが病床を離れたが如何かを見に來た時には大變元氣がなささうで、前日約束したアイヴンホーについては一言も云はず、階段を下つた。

四月二日、前の日の様に寒く濕つぽかつた。乃で、ワッツが、彼の平生散歩に出る時間より少し前に、今日は必ず外出してはなりませんぞと人を以て云はせた。翌朝、彼が彼の部屋から出て來ないのでワッツ夫妻は驚き、彼の部屋に女中に朝餐を運ばせた。女中は、機嫌よく寢床で書物を手にしてゐた詩人を見たといふ。ワッツも病氣してゐる際とて、醫者がワッツの許に來たので、それに、スウインバーンを診斷させた所が、病勢が進んだらば、容易ならぬ狀態を來すといつたので、ワッツ夫妻は、大いに心配し早速熟練した看護婦二名を雇ひ、タマス●バーローに急報しエドウイン●ワイト及びグラス●ボオエルを、招いた。招かれた二醫の、指揮の下に、彼は彼の圖書室に急設の寢床に横臥し、時折、譫語（うはごと）を云つた開かれた戸の所に看護婦はゐた。この病人は、その正氣な場合、見知らぬ婦人が寢床に接してゐるのを見ると平靜を失ふを恐れてゞある。ワッツ夫人は階段上の夫の病室と階下のスウインバーンの病室との間を往復した。夫人が、詩人の部屋に往つた時詩人は、酸素治療を施さうとして看護婦が、口のあたりに管を置かうとするのを拂ひ退け「取り去つてくれとり去つてくれ」と力の無い聲を發した。然し、酸素を用ひる必要があるので、夫人は、夫の代理として、それは、海風と似たものであつて、あなたを健康にすると云つたら、喜んで目を開ひて、口のあたりに筒を置かせて、不平をいはずに蒸氣を吸入した。熱が高いので、胸や肩から毛布を拂ひ除けるさまは苦しさうに見えた。何か喋り續けるので、看護婦は、ワッツ夫人に何國語ですかと尋ねた。詩人は、希臘語を話し又暗誦したのだ。書物の多い部屋で、低く何か口にしてゐる聲の外何物も聞こえず乾いた熱ある唇に酸素の吸入器を向けてゐるものが誰であるかも辨じなくなつた。

夕方に、再び醫者が呼ばれた時には、最早絶望であつた。肺炎が急に勢を占めたのであつた彼の死體の枕頭には、彼の誕生日に當るので、祝意を表する多くの書信や電報が、卓上に未開封のまゝ横はり未知の一令孃が持つて來た水仙が、色あざやかに咲き匂つてゐた醫者ワイトが、病室を去つた時、看護婦が、夫人に詩人の年齢を尋ねたので七三回の誕生日を過したばかりだと答へると、看護婦は、悲痛な音調で、「あー」「あー」と嘆いた。その夜おそく、ワツツの寢床に詩人の狀態を語るとワツツは「クララ、俺の上つ張り衣を出せ彼を見舞ひに下へ行く」と云つた十日間寢てゐてはじめて起つたワツツは、よろ／＼したが漸く、階段を下つて、スウインバーンの部屋に入つた。やがて歸つて來て、うち凋れて詩人に變化があつたら、すぐ來て知らせてくれと看護婦を呼んで依賴した。然しその夜詩人は死なないで翌一〇日朝凡そ一〇時迄、生きてゐたが、終に病みついてより一週間にして極めて易々と長逝した。クララから友人の死を聞いたワツツは、呆然として、やがて目に一杯涙を湛へて呻くやうに、「おゝ、アルジヤナン、彼は、世界中で單純で最も高貴な精神のもちぬしであつた、私の知る最大の詩人、高尚な人間だつた」と云つた。

遺骸は、ボンチヤーチの寺庭彼の血族の墓の中央に埋められた。この墓地は彼の幼年時代に、樂しく遊んだ所で、海の波濤の高く鳴る夜は、彼の墓に立つものにそれが聞こえる。

性格と自ら選んだ位置

詩人の身長は五フィート四インチ半、その弱々しさうな體軀の上に不似合な大頭を持つてゐた。脆弱な外觀は、その肩が急勾配なので一層、弱々しく見えた。その肩の有樣は中年まで、小娘のやうな見えを與へた。常に直立の姿勢を保つたが、歩行の樣を見てゐると跳ねる癖があつた。話をする間は、兩手を脊後に引き或は結び合せた。止まつた時に、しば〳〵一の足指は他の足の踵に向つた位置に在つた。身長に比して頭は甚だ大きくパインズ、パトニイ時代に禿げた。彼は外見上弱々しく見えても、彼の身體は筋肉的持久性に富み、疲れない脚は、鋼鐵線で造られた如くであつた。緣灰色の凹んだ眼は驚くべき强さを以て、前に眞直に据えられた。

彼の精神的及び道德的特性は、彼の父系及び母系にその類似を見ない程特別なもので、イートンや、オクスフアードに於て教育の壓迫に反抗したやうに獨創的生活を營んだ。然し、變則でも怪物でもなく、讃ふるならば愛すべく、溫厚な、最も熱心な才能ある、活動的な、實質的に健康な、決して病的な或は低劣な特種では全然無かつたと謂ひ得るのだ。彼は最も特別な型を形造つたその特種能力は奇妙な道途の上に活き、時々解剖者をして失敗せしめた。

彼は親しい同時代の人々のタイプから遠く隔つてゐたと雖も、自分はさうと覺らないで努めて、虛飾奇嬌を避けようとした。頭髮を常に長くした。禮儀は念入りであつたが時によつては冷淡な感じを與へないでもなかつた。それは彼が、元來、誰彼の別なく接觸しそれらを大變な親睦の間にあるやうに待つことを厭ふ情から出たものである。彼が好感を抱いた男女に限つては、非常に、溫和に親切で巧に言葉を續けたのであつた。彼は共和主義を保持したと雖も本質的には貴族主義者であつた。

彼は場合によつては、自分に關して他人の事でも語るかのやうに、人を引きつける率直を以て語ることがあつた。その一例を擧げるならば、ジョーイットのデンナー、テーブルに於て、レーバーが、彼に向つて、英國詩人中、誰に傾聽すべきかと尋ねたらば、詩人は、嚴格に熱心に、無論、ンエクスピヤー、それから、ミルトン、シエリでその次に置くべきものを知らない、然し、私は私自分を置くだらうと答へた。

彼は自分の詩又は他人の詩を諳誦朗吟することに於て優れてゐた。その聲は、やゝ奇であつても快感を與へるに十分だつた。

彼に對する何といふ理由無しの憎厭は彼が國定の宗教に就いて、やゝ向う見ずの言辭を弄するに至つていよ〳〵高まつた。會話はその詩の如くに、牧師を痛罵することで花を咲かせた。

彼は何物も恐れない天性の勇氣を有ち氣力は決して臆病な態度を示さなかつた。老詩人に對して或る平凡詩人が、不平を抱き大きい杖を以て、彼の散歩の途に要して威さうとした。この暴漢の巨大に比して妖精のやうな彼は恐れることなく、平然として、歩み、いたづらに對手は後から唸つて尾いて來た。それを聽いたワッツが、早速、その暴漢に對して警察を煩さうなど〻躍起したが、スウインバーンは、この親切な友人の顏に笑ひを送つただけだつたといふ。

スウイバーンは、シェリの後身であると評されてゐる。精神の希臘的なこと、想像力の豐かに人を眩惑せしむること、熱情に富んでゐること、宗教の上に政治の上に、反抗的であつたことなぞ酷だ似てゐる。但しその性質はスウインバーンは、シェリに比して鞏固でなほ博學であり批評の才に於て大いに懸隔がある。

彼が作物については前に記述したと雖も、今またこゝにその顯著なもの（書物は發行年）を記しておく。——七五年にはフランス文で August Vacquerie を出した。

The Queen Mother and Rosamond (1861)
Atalanta in Calydon (1865)
Chastelard (1865)
Poems and Ballads (1866)
Laus Veneris (1865)
Notes on Poems and Review (1866)
A Song of Italy (1867)
Appeal to England (1867)
William Blake (1868)
A Critical Essey (1868)
Ode on the Proclamation of the French Republic (1870)

Songs before Sunrise (1871)

Under the Microscope (1872)

Bothwell (1874)

Songs of Two Nations (1875)

Essays and Studies (1875)

Erechtheus (1876)

Poems and Ballads (a second series) 1878)

The Heptalogia (1880)

Songs of the Springtides (1880)

Studies in Song (1880)

A Study of Shakespeare (1880)

Mary Stuart (1881)

Tristram of Lyonesse (1882)

A Century of Roundels (1883)

A Midsummsr Holiday (1884)

Marino Faliero (1885)

A Study of Victor Hugo (1886)

Miscellanies (1886)

Locrine (1887)

Poemes and Ballads (a third series) (1889)

The Sisters (1892)

Astrophel and other Poemes (1894)

Studies iu Prose and Poetry (1894)

The Tale of Balen (1896)

A Channel Passage (1904)

Love's Cross-Currents (1905)

The Duke of Gandia (1908)

なほ死後出版されたものも相當多い。

ダントン夫人の觀たる詩人の家庭生活

ワッツ・ダントンの夫人、クララに、「スウインバーンの家庭生活」The Home Life of Swinburne といふ興味ある著書がある。クララがまだ學校生徒であつた時、その母のリーチ夫人は、ワッツに面會し、直に懇意になり、十六歳の娘をつれて、パインズ、パトニイを訪問した。それが緣となり、クララがワッツの夫人となり、スウインバーンと親しくなつたのだ。ワッツを初めてクララが訪ねた時には、英國最大の詩人には面會せず、後約一年にして正式に紹介せられたのだ。

學生時代からスウインバーンの詩を熱愛し、ことに「バレン物語」を讀んで、ノーサムバーランドの崎嶇たる風景について彼に喜んで話しかけ、崇拜の情を捧げる彼女は以來相見る毎にスウインバーンからも親しまれた。

クララは、一つ軒の中に、性格の違つた二人が住んでゐるのは、奇妙な對照であるとした。階上にスウインバーンが、その隱退所を極めて整然としてゐるに、階下では、ワッツが、その事務所を亂雜にしてゐたと書いてゐる。

詩人が書物を愛することは普通で無く、至つて注意深くそれを扱ひ、常に塵拂ひを備へてゐた。書物を手にして喜ひを感ずる時は宛ら多汁の桃實を喰べる前に垂涎して發する音のやうな響を咽喉に立てた。

夫人は彼と、さし向ひで話してゐると、年齡のほゞ同じい人で、才學者で智力に富んだ熟心な小兒の友達と午後を過してゐるやうに感じた。そんなに詩人はハートとスピリットとに於て若く年を忘れてゐるものゝやうに元氣に充ちて書物の多い部屋で幸福を極めてゐるが如くに眼には光明があり、微笑には溫情があつたと云つてゐる。

彼はマントルピースに三つの燭臺を置き、その各々に蠟燭を燈して讀書することを好んだ。

夫人は、我々が一度彼を見たならば名士といはるゝ人だなと、最初に感じる。況して面會したとなると、誰でもが異常な人物に接觸したと思はないではやまないほど彼の特性は凡庸の圈外に在つた。初めて、スウインバーンたることを知らないで彼を見た時夫人は、

何の職業の人かを推測して、些の躊躇もなく、詩人で、それが外れたら音樂家だと思つた。その頃彼の頭は最早、頂が禿げ髪は黄灰色で顔はパダルースキイを想ひ起させた兩人とも輝く、表情的な、眼を有つて居り落着いたじつとさし向ける凝視と詩人的神秘の様子をもつてゐた。奇妙に、顎鬚と頸脊の毛が濃く且つ他の所の房毛より赤くあつた。これは明かに彼が若い時紅毛であつたことを示すものである。僅の顎鬚と鼻下髯は灰色が混つてゐても、ちよつと見た所では赤色であつた。眼は特に私を愛着させた、それは著しくみごとで彼の顔の中の最大の特徴であつて、もし、眼が心の窓であるならば、彼の眼は眞に彼を語るものであつた。私は眼の色を見極めようと、テーブルを隔てゝ長く探るやうに視た。或時はその眼は色菫を想はせるやうに柔くやさしく、或時は灰色かゝつた綠に見え、或はどうやら青らしいと思ひもした、然し、暗褐色だとの結論を得た。眼の中の班點が、驚くべき表情を眼に與へたと書いてゐる。

又、夫人は、彼は若者のやうに多くの髪を有つといふことは認めるとしても、その頭が軀不相應に大きいと思ふ人には一致しない。ちよつと見た所で、その頭は異常に見えたでもあらう。それは彼の體軀の外見が弱々しく小兒らしくあつて、彼自らもさう思つてゐたらしく頭が不釣合に大きく見えたが、それは疑も無く頭の兩側から刷毛のやうに、凸出した太い髪によるのであつた。髪は頸脊に達する程の長さにしてゐた。天が、精神の贈物に相應するだけの身體を與へたならば、彼はアポロの塑像よりも立派であつたらう。彼の面部の相格は非常に立派であつたが、彼の姿は反對であつた。若し身長が高かつたら、美しかつただらう。肩の急匂配も目に立つた。

彼は、若い時に、美服に特別嗜好をもつてゐたかゐないか知らないが、決して衣服に特別な選好みをばしなかつた。膝のところのだぶ〳〵の黒ズボン、風變りの胴衣、ひくい折襟のみすぼらしい、綿天鵝絨のコートを着け、帽は緣廣いものであつた。要するに彼は平生質素な服を着け、何等飾りの無い黑絹の襟飾より別なものを用ひなかつた。彼が戸外で中折帽子を着て歩く時、やゝ偏屈に見えた、我知らすズボンを踝のあたりまで引上げ白靴下を數吋も出したりすることもある上に、跳ねるやうな歩き振りであるのだ、兵士が鷺鳥歩きをする時のやうに、前へ脚を投げ出して進むのだ。

やゝ耳が聾してゐるので、戸外でも友人同伴を餘り好まなかつた、家に在る時でも他人が突然、進入することを厭つた。又、彼はワッツ等夫妻と、パインス、パトニイ丘の上下

に出遇つても全く知らないものかのやうに、ズン〳〵行つてしまつた。これは彼が家を出ると、鳥が、羽をふるつて翔るやうにウイムブルダン、コムマンの方へ氣もそゞろに、飛んで行くのによる。彼は歩きつゝ詩を仕組むらしい。丘へ歸つて行く途中、彼の思想は彼の創造した音樂の世界に彷徨し、家に入つてからも途中で、彼が歌つた歌によつて刺戟される。

ウイムブルダン、コムマンや、パトニイ、ヒーツを散歩して、他人が人に就いて知り得るやうに詩人は樹木について親んだ。彼は非常に山櫨（さんざし）を好んで、五月に花が咲くと、その熱愛は見るものを驚かせた。よい香を有つ此の木の賞讃には飽くことを知らなかつた。ノーサムバーランドに在つた時から樹木に對して深い興味を抱いた彼は、その土地を、英國中のどこよりも天然のまゝで莊大なものとした。樹木を一瞥した一瞬早くもその樹の名を知るといつた有樣で、決して樫と楡、赤楊と掬（ぶな）とを誤るやうなことはなかつた。彼は同種の樹木間の差違を認めることが、人間中の誰彼を識別するが如くであつた。樹木中、山櫨に就いては殆んど、類緣者に對する口吻を以て語ることもあつた。そしてその美の前に敬意を表して去るといふ程愛したものだ。

毎日、コムマンを横切りてウイムブルダンまで散歩したものだ。

詩人は、彼の家族以外からの書狀は自ら開封すること少く、大抵、ワッツか、ワッツ夫人によつて開かれたのだ。午後、新聞紙、ポール、メール、ガゼットが來るが、熱心にそれを讀んだ、彼は、へいぜい何時より何時まで何をするといふやうに、極めて時間を堅く守つたので、その生活も、事務家らしく見えたが實際は事務家でなかつた。午後十時に、寢室を出で、二階の圖書室に入り、そこで朝食を一人攝ることが好きであつた。又、彼は彼の頭字の彫られた古い銀の珈琲壺に珈琲を入れることを樂しんだ。その日の新聞を見、凡そ十一時頃、ウイムブルダンまでの散歩に出る。これが彼の健康を保つ上に有効であつたことは言ふを俟たぬ。晴雨に關らず、外套、傘、手袋などを用ひなかつた。散歩より歸ると子供らしい、跳ねと音とを以て、寢室まで階段を突進して、下着を一切取換へる。それ故、洗濯物中に襯衣の數が多量を占めてゐた。一時半に食堂（ランチ）に來り、中食をなし、身の上の出來事や購入物について語る。中食後、彼は睡眠するために寢室に入り四時に、圖書室に下り、六時まで讀み又は書く、六時から、心地よげに、彼の大變愛好するデキンズの著作などを携へて、夫妻の居間に來て、一時四十五分間ほど讀む。八時、一同が夕食を取

りに食堂に入り、それが終ると詩人は、圖書室に入る。これがくりかへさるゝ常規なのだ詩人及びワッツの友人が訪ね來ても、此のパインズでは、時間を嚴守することを尙んでゐるので常に定められた順序を亂されることは無かつた。

クララ夫人は、詩人のユーマーに比較的通曉してゐる。そして、苛烈、遊戯的、實際的、三つのユーマーの表現を擧げてゐる。

なほまた、スウインバーンのホーム、ライフを說いて、デキンズに關して、言はないものは不完全を免れぬとした。ビクウイク、ペーパースの筆者は極端に崇拜されてあつた。此のヴイクトリア朝の小說家は、詩人ほど熱心でないにしても夫のワッツも賞讃したものだ。デキンズも、スウインバーンも共に聽衆を愛した、後者は、二人の聽衆の爲めに一時間以上も讀んだだらう。デキンズは公會に讀むことによつて多額の收入を得た。彼は俳優的でありその聲は、變化に富み聽衆を熱狂させた、詩人はさういふ人氣は持たなかつたにしても、聽衆に向つての精神態度は同樣であつた。二人者はまた窮乏人に對する愛情と同じ程度に、富者に對して憎惡を抱いた社會主義的學者であつて、詩人の富者に對する蛇蝎視は隨分深く、プロレタリアトに味方したものだつた。

詩人は、友人を愛するの情に深く、海洋を好むの情に淺くなく、また甚しく嬰兒を愛した。書物を愛すること著しく、書物は彼の生命であり、それらは、食料の如くに彼の存在に根元的なものであり普通人が日々の食品が無くは病み且つ死んだやうに詩人は日々書物無しには意氣頓に銷沈した。

嬰兒を觀ると、地上に新しく到着した或物の美によつて暗示せられるやうに魅せられるのであつた。然し詩人は小兒の腕白の行爲について知らず又、じれる赤ン坊を乳養する經驗をもたなかつた。それ故嬰兒や小兒を詠じた詩篇中に、決して、氣むづかしい小兒や拗ねたり又は、食を貪る子について言つたものが無い。

クララ夫人の觀察によれば、詩人は二重の人格をもつた。その一は家庭的サークルの親しみに於て知る極めて愛嬌ある彼で他の一は訪ね來る知人又は初對面の人に對する違つた樣子の彼である。ワッツや、夫人と共に詩人が一人ある場合は全く自然で、愉快に時には十分戲談を云ひ、生活の些事にすら興味をもつと雖も、訪客があると、別人のやうになつてしまつたさうだ。

革命的情熱、比を絶つ國語の妖術

ジョオジ・エドワード・ウッドバーリイは、彼について次のやうな觀察を下した。彼の天分はパッションの才能にある、熱情は彼から離すべからざるもので、恐らくその天才の單純な表はれは革命の歌に在る。古き佛蘭西の火は、その最後に、彼の松明に燃えたので、その火の炎は、コルリッジに一時燃え、セリの一生及び死を包んだもので、又ミルトンからランダアまで、英國の詩人の有名なものゝ間に、傳はつたものであつて、此の詩人の時代では詩人が永久に最も頭角を表はした獨立の非凡なる詩人共和主義者の先驅者だ。

私は君達の脣に於ける喇叭である。
君達の小喇叭は君達の叫びで滿ち、
君達の呼吸を以て響く。

これが彼の自由に向づての近代的戰爭に於ける彼の態度である。それは伊太利の爲めの愛而して愛國者 Mazzini の賞讃同情の收穫である歌に始まる。彼は信仰の立場を言明しない。彼を捉へるものは智的熱情でないからだ。それは、燃える熱情、高め揭げられた意氣であり、注ぎ流れる感情の洪水、光彩と音樂そして大なる道德力に於ける多くの力の合流が即ち革命の原因であるのだ。その單調は幾分、共鳴の性質及び形容の類樣にあるとは云へ、本質的に感情的であり、人間永遠性の要素である感情それ自身の深い變化の無い深さの單調であるのだ。

詩人の革命的熱情は、英國の誇りである無限の愛國主義の新しい形をなした。革命的歌謠はその量に於ても、光輝に於ても努力に於ても並ぶものは無い。それは一生を流れた上になほも噴湧力をもつとも讃ふべきだと。

スウインバーンの著述に眼を注ぐものは、誰でも、その學識の卓越該博なのに驚く、英國詩人で彼ほど外國の詩歌に通曉した者は無からう。彼はクラシカル又ロマンスの國語を使ふことに妙を得、カレッヂに在つた頃に早くも、佛、伊の國語に通じてゐるためテイラーリアン賞を護た。その外古語に曉るい名譽を負つた。彼は自由に伊、佛語で詩を書いたその研究は詩だけに止まらないその博識も散文の上に奔流してゐる。ブレエクの天才に關し周到精細なる說明、エリザベス朝の劇に就いての大研究、ヴイクトル・ユーゴーについて

の調査などにそれが見られる。彼はまた挽歌やソネツトなどに於て批評的讃辭を文學の功勞者に呈してゐる。

彼の文學的要素は、散文の批評に於てよく顯はれて居り、又、明らかにその戯曲の形式の上に觀取される。彼は古代の詩から得來つた形式を近代化するよりは自分の形式を古代化しようとしたとも觀られる。彼は彼の時代から段々分離して行き古英國及び希臘の再生に向つた。「アタランタ」は、さうした行方の最初のものであつた。「イレクスジウス」は、一層その企圖の成功を示したものである。「クイン、マザー」「ロザマンド」は措辭や回想に於て、シエクスピヤー的であるが、まだそのアートは意識した復歸と謂ひ難い。然し「ロクライン」や「シヤートラー」「ボスウエル」「メリー、スチユアート」の三つ一粗物や「マリノハリエロ」はドラマのエリザベス時代化の新樣式に依つたものである。

彼は同時代の事實標準、理想、信念から脫したが、彼が再び一體となし能ふだけ遙に他の時代と場所との事實の間に自己を委した。彼の生來の慧敏を學識が助けて彼を異なつた時代の文學界にも一國民の資格をもつた自由人とした。

彼は、神話愛好者で、夢想家で、想像の藝術家であつた。彼の美術的保守主義が古い詩形の撰擇保持及び趣味にあつた古い稗史、歴史的壯大なものゝ題を取扱ふやうに向はせた總て古い形のものを新にすることに叛いた。彼は同時代の人々と意見を異にした用語の潔癖家である。

彼の詩はその旋律（メロディー）を以て鳴る。「アトランタ」の始めの合唱歌（コーラス）の如き地上の新聲として人々の耳を喜せた。その音樂は聽衆に忘れ難い深い感銘を與へる。抑揚も樂節も作者の創造的天才か性質づけてゐて兩者は不可分的であり。綴音の多樣が一の如くに流暢に活き、響の色と云はれる所のものが調子の下りに閃き出る。これは特別に、又注意を引く詩人獨占の天賦である。青貝のやうな又、嵐に於て破れる綠波の如き彼の走らす歌の船首の虹をなす水煙の如き抒情詩的眞珠光は、その變化の失敗しない不思議なものであり、國語の妖術で、韻律に於ける呪文であり、音響、停唱、省略の單なる力による魅惑である。即ち純粹に韻律的な天禀であるのだ。

彼は好んで頭韻（アリタレイシヤン）と反覆（レピテシヤン）とで其の詩を實に耐ならく耳に快いものにした。試みにこゝに Ityl'us 一篇のはじめの部分を引いて、如何に諧調に富むかを示さう。

Swallow, my sister, O sis'er swallow,

How can thine heart be full of the spring?
A thousand summers are over and dead?
What hast thou found in the spring to follow?
What hast thou found in thine heart to sing?
What wilt thou do when the summer is shed?

O swallow, sister O fair swift swallow,
Why wilt thou fly after spring to the south,
The soft south whither thine heart is set?
Shall not the grief of the old time follow?
Shall not the song thereof cleave to thy mouth?
Hast thou forgotten ere I forget?

Sister, my sister. O fleet sweet swallow,
Thy way is long to the sun and the south;
But I, fulfilled of my heart's desire,
Shedding my song upon height, upon hollow,
From tawny body and sweet small mouth
Feed the heart of the night with fire

此れについて、ストレスドシラブルとアンストレスドシラブルとの具合、及び各行の頭韻の用意、それからまた押韻が a b c a b c になつてゐる所なぞ韻律の大家が自らなる胸琴の響を傳へた跡と見ることが出來る。

「詩と俗謠」は彼の名聲を高めた作である。この作には抒情詩特性が實に卓絶し、後々の詩卷よりも、範圍、種類、効果に於て大きく、聲調、辭句の上ばかりで無く、流暢、音響の色、感動思想の全區域に伴ふ樂的感覺の融合纖麗優軟、なほ又、表現の媒介物として國語の新示現をなした詩の一卷として勝つてゐる。それは新魔術かのやうに見えた。その詩は光輝と精確と、短と長と閃きと力とで、劍舞のやうである。然しそれに親しむにつれて驚愕怪訝の愉快が減る。然し晩年、新しい方法に盡した。その技術の手段に於て正確に怜悧な學力の智略を以て天禀を完成した功勞者として若い時代の名譽を保持し增加した。

彼の抒情詩は劇を短くしたもの、戯曲は斷片的敍事詩、物語は抒情詩的熱情と劇的逸話

との混合の傾向を有つ。「トリストラム、オブ、ライオネス」は、この點で彼の最上の特質を代表したものである。

その智的樣式に於て、その表現上事物を配分することにおいて、その、性質、事件、思想を無駄のないやうに寫出すことに於て、及び藝術的推理的短縮の點に於て此の詩人特有の操縱力はまだ知られてゐない。實に彼は韻律に優れた高級な抒情詩形に於て無比である。

彼はパツションの經驗を表出するに顯著な特徴を有つてゐる。然しそれは、初期の詩に於て一層それを示す。パツションは人生の一要素と觀る彼を引き附けたのであつた。

海洋の詩は彼の自然詩中、冠たるものである。海のやうに活潑に、また流動的に、皷舞的な詩の中に、海の音聲をも編み込んで居る概がある。彼は、水夫系の一兒とも言ふべく幼年時代に、海は彼にとつて夢、想像、感傷の道筋であつた。彼は太陽を崇敬すると云つたが、海は戀人であつた。又、海に對して別に想像的價値を與へてゐた。彼には、海が、イングランドの自然象徴と思はれたのだ。又、彼には海が、人間界の精神の自由に於ける自然象徴と見えた。

彼の自然詩は、その人格に或接近を持つことについて添加的魅力がある。何となれば、それは、彼の生活の習慣、多年彼が過し來つた親しい場所、友情、愛人などと密接に繫がつてゐるからだ。記念物、交友は、その詩的感得の内に大部分の位置を占める。フランス、イタリイ、の旅及びイングランドの海岸の休日の旅は、詩の内に足跡を印してゐる。

自由、諧調、感情、宿命、自然、愛、名聲この七つが、幼年時代から、彼が搔き鳴らす琴の七絃である。

彼は、最初の「デジケーション」の劈頭に、

海は砂礫にその貝殼を與へる
地は海洋にその河川を與へる
それらは數多であれども、我が贈物は一つ
我が最初の生産、我が詩篇

と歌つてゐる如く、最後まで、たゞ一を保持した。即ち最初の光、最初の愛に忠實を失はす正義を脱せず。倦む事無き勤勉、不畏不退の勇氣を以て、理想を追つた。彼は暴壓政治か或は幾分自治を許した土地に於ける自由主義者として、歐洲の「共和政治」の桂冠詩人

であつた。彼はイングランドの國民詩人であり且又、空前の音樂を以て立派な悲劇を以て想像的ロマンテツクな感情の詩を以て、主題、情緒、技巧の多樣な高尙純一な詩の數多を以て英國文學を豐饒にした。のみならず、散文を以て詩の贈物に添へた。その散文は、有名な英文學の主要部分並びに佛國の近代的詩歌精神に於ける詩人の鑑識の富を包含してゐる。かやうな直覺的批評の寶玉は他の英詩人の未だ殘さなかつたもので、全く彼の長い勞力の結果である。

彼は私的生活に於て、蟄居的であつたが同情ある友人とは親しく交り、多くの知名の士に面識を保つて居り大きい出來事や、機會に遭遇しては、公の同情を示した。然し、あの天才と努力とに係らず詩人として、生前、世間から餘り好遇せられなかつた。勿論その詩の力は拒み難いが、正當に理解するものは僅であつた。然し、彼は、徒らに、群衆の讃賞によつて心を動かすやうな人物ではなかつた。

スウインバーンの詩は、難解である。これを、わが國語に移し、吟誦に適せしめようとすることは、餘程の難事である。然るにかゝはらず、これを試みた所以は、此の私の譯詩以前に譯詩集又は註解書のあるを聞かないので世の博識から敎へられたい慾望が少くないに由る。彼の詩、一篇、例へば「イティラス」にしても、漫然、これを讀んでは、その妙味が解るべくもない。

こゝに、ラフカジオ、ヘルン（小泉八雲）の書物中から、便宜上「イティラス」に關係ある事項の大要を引いてみると次の如くである。

昔、アゼンスに、パンダイオン Pandion と云ふ王樣があつた。この王は、プロクニ Procne と、フイロミイラ Philomela といふ、二人の美しい娘をもつてゐた。この王は强敵の惱ます所となつたので、スレイス Thrace の王、テイルス Tereus に救助を求めたテイルスは、パンダイオンの乞ひを容れこれを救助した。パンダイオンは、それに報いるために、娘のプロクニを、テイルスの妻にとおくつた。テイルスは、妻をつれて、自分の住んでる町ダヴリスに移りそこで二人の間に、イティラス Itylus（或はアイティス Ityls）といふ息子を產んだ。

程經て、プロクニは自分の妹（姉とする人もある）の、フイロミイラに大變、會ひたくなつ

たので、夫に、アゼンスに行き妹を、つれて來てくれといつた。乃で、テイルスは、つれに行つた。然し、歸途、妻の妹を姦してしまつた。姦した上にもこの女が、姉にこの事を告げること恐れて、無慙にも、舌を切つて森の中に捨てゝ自分だけ、歸つて、プロクニにフイロミイラは、途中で死んだと詐つた。あはれなフイロミイラは、或百姓家に行きそこで織機によつて織物をした。そして織物の緣の方へ希臘語で、自分の體にテイルスが加へた暴行事狀を織り込んで、これを姉の許に知らせた。それを知つたプロクニは、妹のために夫に對して復讐をしようと決心した。

プロクニは、自分の子、イティラスを殺して其の肉を料理し、これを夫に喰はせた。喰つてしまつたあとで、それはイティラスの肉であることを知らせて、口のきけない妹と二人で逃げた。テイルスは、兩人を追つかけた。てゝに於て兩人は、神に救ひを求めた所が、神は、その祈りを聽いて、フイロミイラを、夜鶯に、プロクニを燕に變じた。（プロクニを夜鶯にフイロミイクを燕にしたとも傳へらる）また殺されたイティラスは山鳩に、テイルスは鷹になつた。

キイツのあの「夜鶯の頌」は立派なものであるが、このイティラスは、英佛伊その他の夜鶯に關する近代詩中の最も秀れたものだ。これは韻律學 Prosody 上、非常な美と音樂と、詩中感情の迫つてゐるといふ點とで最も佳いものである。實にこの詩は他の同種のものと異つてゐていつ迄も愛好せしめる。然し、私が述べた話を知らないではこの詩は了解されないものである。この詩は夜鶯が燕に云ひ掛けてゐるのだと思つて讀まねばならぬ。「南へ」といふのは、姉妹の鄕里がスレイスから南にあたるとか、「ダウリスの餐宴」とはイティラスの死體を酒席に上げたのがその地であるとかいふやうに解してこそ興味が深いのである。

これはイティラスのみについて云つたことであるが、スウインバーンの他の詩も、全く不用意で讀んでは、その妙味を解し得られない。

イティラス

燕(つばめ)よ私の姉さんよ、おゝ姉さんの燕よ、
どうして、あなたの心は春で一ぱいになることが出來ますの？
千度(たび)の夏は過ぎ去つたにしても
春の中に追ふべき何をお見つけになりまして？
あなたの心の中に歌ふべき何をお見つけ遊ばして？
夏の盛りに貴方は何をしようとなさるの？

あゝ燕よ、姉さん、おゝ美しい疾飛(はやと)びの燕よ、
何故、春を追うて南へ飛んで行かうとなさるの？
溫かい南、そちらへあなたの心は向いて居る

イティラス

あの昔の悲しみが、附いて行かないのでせうか、
その悲しみの歌が、あなたの口に纏着(まとひつ)きはしないのでせうか。
私が忘れる前に、あなたは、お忘れになりましたか。

姉さん、私の姉さん、おゝ、飛んで行く美しい燕よ。
あなたの太陽への、南への道は遠い、
けれど、私は私の心の願ひを滿して
私は私の歌を山の上に谷間に
黄褐色の躰から、美しい小さい口から散らしてゐます。
そして夜(よる)の心に胸の火を貢(みつ)いでゐます。

わたし、夜鶯(ナイチンゲール)は、春の間を
おゝ燕よ、姉さん、おお、移り氣な燕よ、
まつたく春の間、春が終るまで

露に差す、月の光に包まれて歌ふのです、
そして野の鳥は追ひ慕ひ
飛び立ち、日をおびてゐるのに。

姉さん、私の姉さん、やはらかい氣輕な燕よ、
假令、あらゆるものが春の客間で宴(うたげ)してゐても、
どうして、あなたがそれを喜んでゐられませうか。
あなたの飛んで行かれるあとを追つて私は飛んで行きません。
生けるものが忘れ死したるものが記憶するまでは
あなたが記憶し、私が忘れるまでは。

燕よ、私の姉さん、おゝ歌つてゐる燕よ
あなたが、どうして歌ふ氣になれるか〻解(わか)りません。
あなたは心を持つてゐられますか、かつての悲しみは過ぎ去つてしまつたのですか

イティラス

あなたの君主である夏は追うて行くによろしく、
あなたの戀人の春の足は美しうございます
然し何をあなたは春にあなたの戀人に話さうとなさるのですか。

おゝ、燕よ、姉さん、飛んで行く燕よ、
私の胸は、火焔に溶けた燃え屑です
また私の頭の上では波が打ち合つてゐます、
然し、あなたが留まり、私が追ひも致しませう
私が忘れ、あなたが記憶し、
あなたが記憶し私が忘れることが出來たなら、

おゝ美しい、さすらひの姉さん、おゝ變り易い燕よ
心の別れが私どもの相違です
あなたの心は木の葉のやうに輕い

然し私の心は海の深江の窪みへと沈んでゆく
イティラスの殺された場所へ
ダウリスの饗宴とスユレイスの海へと。

おゝ、燕よ、姉さん、おゝ早く飛ぶ燕よ、
私はあなたに、ちよつとの間歌はぬやうに嘆願します
あの軒と鴨居は濕つては居ませんか、
あのはつきりしてゐた機織物、
あの小さい殺された體、花のやうな顏を、
あなたが忘れて、私が記憶して居るのでせうか。

おゝ姉さん、姉さん、あなたの最初の子、
抱きつくあの兩手、追つかけるあの足
今でも叫んでゐるあの子の血の聲

イティラス

イティラス

誰が私に記憶させたか、誰が忘れてしまつたか
あなたは忘れてしまつたのだ、おゝ夏の燕よ、
然し私がもしも忘れる時が來たら世も終りでせう。

配偶

もし、戀人が薔薇のやうで
私がその葉のやうならば
悲しい日、また、歌の日を
綠色した歡樂も灰色をした悲哀も
枯野あるひは花園に
抱き合ひ一緒にありませう、
もし戀人が薔薇のやうで
私がその葉のやうならば。

もしや私が歌詞

配偶

あなたが律調のやうならば
正午快く降る雨に
よろこびあつて接吻する
鳥の如くに唇合はせ
快樂は一つ、音は二つ
もしや私がうたことば
あなたが律調のやうならば。

もしやあなたがおゝ、よい人よ、
生で私が死のやうならば、
そよ吹く風に遊ぶ掠鳥
あの水仙の香りとで
彌生が滿ちるその前に
ともに照りまた雪とも降ろよ

もしや、あなたがおゝよい人よ、
生で私が死のやうならば。

もしも、あなたが悲哀の奴隷
私が喜悅の小姓なら
戀しい顏にあざむきに、
夜や晨の涕涙に、
少年小女のほゝ笑みに
この世の限り遊びませう。
もしも、あなたが悲哀の奴隷
私が喜悅の小姓なら。

もしも、あなたが四月の姫で
わたしが五月の殿御なら

日が夜のやうにかげるまで
夜が日のやうに明むまで
時の多くを花を投げ
日數多くを花引いて
もしや、あなたが四月の姫で
わたしが五月の殿御なら。

もしやあなたが快樂の皇后
わたしが苦惱の君主ならば
二人は戀を狩り捕へ
飛べないやうに羽根を抜き
鳴けないやうに口を閉ぢ
足に調子を教へませう
もしや、あなたが快樂の皇后

わたしが苦惱の君主ならば。

會釋と別離

Ave atque Vale.

——シヤアル・ボオドレールのおもひで——

一

あなたの上に薔薇を撒かうか、芸香を撒かうか、月桂樹をまかうか
兄弟よ、あなたの覆ひ物だつた此の屍の上に。
或は又、海に朽ちた靜かな海石竹を以てしようか、
又は、夕暮に降り來る雪を解く急雨に醒まされて
まだ睡げな夏の森姫の織り成すやうな
飾り氣の無い繻線蘭か又はスカンボを以てしようか。
或はまた、あなたは其等よりも此の世に在つた時の如く、
熱地の人が足で踏んだ事の無い

北國の海邊の落穂よりも更に美しい
盛夏の熱で青白い
半ば萎びた火のやうな赤い花を望まれますか。

二

さう云ふのは、その北海の濱邊よりも更に廣大な空々の更に膨大な諸星の
熱烈な疲れた光輝が常にあなたを誘つたのだから。
あなたの耳は、レスビアの岬のまはりの海のすゝり泣く所に
さまよふ水の嘆きの總てを知つて居る。
また秀れた歌の頭をいと深くも隱したる
ルーカデイアの墓を何處に在りとも知らぬ
哀しい波より波への甲斐ない接吻を知つて居る
あゝ、彼女の接吻のやうに鹽辛く味ないものよ！
荒海は彼女を卷き綠の灣は、こなたあなたへと運ぶ。

そして彼女を惱ましし惡しきことを働けども
キユピツドは如何ともなし能はぬのであつた。

三

兄弟よ、往時、あなたの歌つた時期には
我々に見得ない秘密と悲哀とを見て居つた。
生物の生存しない地方に夜開く
あなたの明らかな眼にはあらはで、他のものに見えない
はげしい戀、そして愛らしい「惡の花」
淫逸な時間の秘密な收穫
形無き罪、言葉無き快樂
心打ち碎かれし者の閉ぢた眼を泣かしむる
惱ましい眠りの中に不思議な夢
又、あなたは各人の顏に各人の陰影を見られた

あなたは人々が自ら蒔き自ら刈る因果の理を見られたから

四

おゝ、眠らない心と眠らない陰氣な魂、
眠りを喝望し、この上、生を望まない魂
この上、戀を望まず平和をねがひ、爭鬪を求めない魂？
今や、死の朧の神々が、しつかり摑んだ。
魂も軀も、あらゆる歌の泉も。
戀の惡を行はぬ所
その閉ぢて開かない脣のかげに
刺のない喜びが口泡も毒牙も持たない所にゐるは宜いではないか
魂が身體より滑り脫け
又、肉が骨から何の痛みも無く
露が花房から滴るやうに離れる所は宜いではないか。

五

最早よし、終を越えたあなたには始めと終りは一である。
おゝ、見えない友の握らぬ手よ、
その手にはもぎ取るべき木の果も、贏ち得べき名譽の棕梠の葉も無い
勝利も、仕事も、色慾も無く
たゞ、枯れた水松の葉と、いさゝかの塵ばかりだ。
おゝ靜かな眼、そこには光は何事をも語らず
それらには日も口つぐみ、また如何なる夜も、
朦朧たる指もてその視覺を塞が無い、
また汝が物云ふ時、不意の靈が來て思想を物語ることも無く、
眠つて居る、光に對して眠つて居る。

六

あらゆる不思議な時もあらゆる不思議な戀も去つて了つた、
夢も望みも陰氣なまた樂しい歌もすべて終りだ。
あなたが嘗てこの世で幻想に求めたやうな
美しい大きい頭の下かげに
非常に大きい乳房の奥深い部分
眠つてる巨大な手脚の莊嚴な斜面
濕つた山風のすゝり泣く
舊世界の松林の香と影とを
なほ保つてゐる甚だ髪の毛の多く重い
戀人のやうな青白い大女の
大きい膝と脚に、あなたの場所を見出したのですか。

七

あなたはあなたの嘗ての幻想に似たものを見出されたか

おゝ、不思議な花の園守よ、如何なる蕾、いかなる花の
蒔かれ、また幽闇のうちに如何に集められたかを見出されたか。
失望、恍惚、嘲弄は今あなたの在る所では如何ですか。
又、そこで生活はどうです、善、惡はどうですか。
木の實は塵のやうな灰色か、或は血のやうな輝きか。
日と月と沈默し、あらゆる星の物言はない低い地面の
その暗の世界には我々の世の如何なる種が生へるのか
その力の失せた野にはこの世の何の根が生きてゐるのか
そこには何程かの花、
又、果實があるのか。

八

あゝ、然し、私の飛び行く歌が
おゝ、巧奇な年長の詩人

あなたの一層早い歌と、足跡とを追ふとても
盲目で舌の無い死の番人の
不可思議な嘆笑の曖昧な嘲弄、
覆面したプロザパインの空しい瞥見、
無視された役に立たぬ泣いた眼の、
顧られない涕涙の小さい響、
そして又、青ざめた口から出る死の嘆きの節奏を
これらを、たゞこれらをのみを耳傾ける精神は聞き、
かやうなものゝ起るをのみ見る。

九

あなたは、言葉の翼で追ひも及ばぬ遠い所に
また思想や祈禱のとゞかぬ遙かな遠い所に在る。
風であり空氣である所のあなたに何が我々を近づけず苦しめるのか、

すべて虚に見える所に見入る我々を何がさまたげるのか、
然しながら或想像を以て、希望を以て
夢は死を追ふ、宛ら、風が飛び去る炎を追ふやうに。
我々の夢は我々の死者を追ひ求めて得ないのだ。
そしてなほ、夢よりも早く微弱な炎は飛び去るのだ、
炎の光はそことも知らぬ空に我々を失望させる
今もなほ効無くされた熱心な耳は聞こえず
避けられた目はなほ盲目である。

一〇

あなたには、おゝ、あなたには決して、時の變化の内に
觸られない、たゞこの悲しい靈の響、
あなたの速い精神の影、この閉ぢた書物にのみ、
私は手を置く、そして死と雖も私の精神を、

あなたの歌の聖餐式から疎隔するもので無い。
葬ひ詩人達の玄關先きに於ける
追憶の數々の詩調
私はそれらに禮拜し、觸れ握り、且つ抱く
さながら、一つの手が、握手すべく私の手に在るが如く、
なほ又私の耳の中には多くの送葬者の
弔ひの曲は鳴りひゞく。

一一

私は、會葬者の中に、
火葬積柴が焦がされ、又、芝土が堆まれ
古なじみの會葬者が酒灌ぎに立つた時のやうな位置に
私は立つて、神と死者に祈禱も讃美もなく
たゞ尊崇を拂ひ

私には解らない幽界の神々に手向を爲し
そして私の種園に成つた
蜂蜜と香り物と
又、この冷たい歌曲に得能ふ所の果實を捧げ
そして又、オレステーズのやうに
墓に切つた卷き髪を横へる。

一二

併、あなたの死は、誰が手を下したのでもおく、又、或大逆に遭つたのでもない
トロイを廢墟にした炎である王、
彼の低く横はる頭にも似ずあなたは横はる。
そしてこの墓がアガメノンの墓のやうに
忽ちに涙をそゝらないあの詩聖の書物を開く時
そこに流されたうるはしい不朽の涙の滴々

人皆の聞くやうな涙は落ちない
あなたにオレステーズが無いからエレクトラは悲しまない。
然し、いつの時代をも滿して行く最高のミューズ神は
記念の骨壺を持ち、われ〳〵の方に屈み泣き
われ〳〵のアポロ神の心は悲しむ。

一三

光の王アポロは、薄暗いこのわれ〳〵の間に
その神聖な力を惜しんで、しば〳〵、
輝く處の歌の柔い焰と熱とを以て
開いた心、柔められた脣にも
その音樂と力とを表さないとも、
あなたの脣には、まことに、苦酒を以て彼が觸れ、
苦い麵麭を以てあなたの脣を、養つた。

なほ、たしかに靈魂の糧は彼の手から來た、
その炎であなたの精神の傷を癒した火は點され
あなたの饑えた心は彼に養はれた
彼は我々の心を名譽を以て養ふのです。

一四

それ故に、あらゆる日と歌の神である
彼もまた、今、あなたの靈の日暮れに身を屈めて
あなたの糸杉の冠に月桂樹をまじへて
あなたの遺骸を非難と忘却から救はうとする。
彼はまたあなたの過去、現在を凡て見てゐるので
あなたの哀しく聖い心を憐み
彼の多くの子たる詩人等の中の最近の死者あなたを弔ふ、
そして不可思議な涙と、異なつた嘆きを以て

最早諧調の無くなつた口、光を見得ない眼を神聖にし
またと復起しないあなたの頭の上に
低き空から光を輝すのです。

一五

忘れ河への途上で彼と共に泣いてゐる一人がある。
そして涙で肌寒くその常ならぬ胸を汚す、
それは空ろな丘に隱れたるヴイナス
かつて、シシリヤに在つた變形の者
ギリシヤの聖なる笑ひを疾つくに失つた脣を有つ
もはやエリクスのものだといはれない顏をもつた幽靈
悲しいそして華美好みの神は
あなたにも豐麗な肉と歌の蠱惑を以て
彼女は、あはれな第二の捕獲物であるあなたを

人の足跡無き所に第二人目として歩け
地獄からの激しい幽靈に行けと強いる

一六

さて今は、香料と甘き夜に痛む精神を
戀人の疲れた眼と手と感じのない胸とを
如何なる聖なる杖も花咲かしめ得ず
如何なる合唱歌の挨拶も光へ誘ひ得ないであらう。
此等のものには何の助けとなるべきものもなく、償ひも無く、
傷けも無いおゝ友よ吾等の歌の總ても、
死を揮ひ去る事も出來ねば又生を永續せしむることも出來ない。
然し、私は常春藤と薔薇と野葡萄と
あなたの死骸に對する粗野な歌とを以て
少くとも、白い夢の住む所を私は滿すのです、

又、見えない宮を修飾するのです。

一七

眠れ、若し人生が貴君に辛かつたらこれを宥し
若し樂しかつたらこれに感謝しなさい、あなたは最早この世のもので無いから、
感謝も赦免も、どちらも善いことですから。
秘密と悲しみの花園から
あなたは、終日、無駄に手を動かして
あだな花車を編んだ秘密と隱影との病んだ花
悲しみと罪との緣の蕾、灰色の遺物
毒を以て青白い、殘忍な芳香
睡眠から躍り上る慾情、出立した思想で
死があなたに持ち來したやうに他日我々を
この世の日から別な日の中に運ばないものであらうか。

一八

さあ、あなたにおゝ今は、靜かな靈であるわが兄弟よ、
私の手から、此の花輪を、とつて下さい、
葉は薄く、冬の香りは冷たく
「ナイアブ」の子宮よりも更に悲しく胸のうつろには
一つの墓をもつてゐる惡い宿命の母である
おどそかな地球は冷たい。
然し、この世の生を終つたあなたは滿足し給へ。
最早あなたの前にはわづらはしい事件は無い
最早、あなたに對して爭ふ何等目に入るものも聞えるものも無い
あなたには今やあらゆる風は日光のやうに靜かに
あらゆる水は岸邊の如くです。

小兒の笑ひ

あらゆる天の鐘は響き
あらゆる天の鳥も歌ひ
あらゆる泉湧き
あらゆる地の風は
あらゆるよい響を持つて來るとも
また琵琶彈きの手だくみ、鳥の音調(しらべ)
曉に戰ぐ森のひゞき
噴き出る水の愛らしい言葉、
暖い蒼白な天氣の風、
耳に入るあらゆるものよりも更に遙に快い。

その施律が終る前には
誰も未だ聞かなかつた唯一つのものがその中にあるのだ
それは太陽の下、人間の耳にするものゝうちで
最も快いものであることを誰も知らない
今後、天上のものとして欲しいものである。
和らかでもあり強くもあり高くもあり輕くもある
光そのものゝ響は
あらゆる悅樂の靈が
小兒の疊りの無い笑ひを充した時にこそ
朝の薔薇色なした天空から聞かれるのだ。

歡迎の黃金の鈴とて
そんな音調を未だ曾て發しなかつた

そんな大膽な音調でそんな樂しい時が語られなかつた。
天上に向つて鳴りひゞく
この黃金の口のやうに。

もし又、金の鳥冠（とさか）の鷄鶏（みたこまい）が、
夜鶯のやうに巧に歌ふ時があつても——そんな時だつて、
人々が見たり聞いたりしたものだつて
七歲の小兒の笑ふ時にくらべると
半分も心地よいものでは無からう。

小兒の感謝

如何に人々が我々を低く位させようとも、
また如何に高く我々が位置を贏ち得ようとも、
小兒は我々よりは遙かに高い位置を占めてゐて
我々を愛して吳れる、
我々よりも更にいつくしみ深い愛を以て
そして花よりも美しい笑ひを以て
あだかも、太陽が光線を
迎へ入れることに對して我々に感謝するかのやうに。
神聖過ぎる慇懃を以て

彼等は神であるのでその惠みが
此の世のことに疎いが故に、かやうに彼等をあやまらしめる
彼等は、われ〳〵の讃仰を親切と呼び、
我々からの石の贈物を玉と呼ぶ
彼等は我々を彼等に對して善良なものと考へる、
彼等の一瞥、呼吸、出現こそ
我々に善良過ぎる程の贈物なのに。

山々に圍まれた湖畔の
氣高い白髮のあの詩人も
不親切な心の人々から彼が
歌や話を聞いた時よりも
更に多く幾度もあの偉大なる心に憧憬を感じたのだ。
そしてまたその堂々たる力も

小兒の感謝

峻嚴から、やさしい心へと和らげられたのだ
小兒の示した感謝を思ひ出した時に。

人々の耳にさまよふ
小兒の感謝の言葉に對して
大人は、如何なる言葉を表徵として
又、如何なる崇敬の涕を
熱情にまで上らせて
又、從順になつた精神と靈との
如何なる嬉しさうな伏拜の樣子で
感謝を表してよいものか。

夜でも日の輝くやうな眼を以て
蜜のやうな脣の接觸を以て

蜜汁のやうな言葉を以て
私に禮をのべるのを聞いて、小兒よ、
お前の兄弟の天使等も微笑するよ。
他の何物よりもすぐれたおまへの贈りものに對して
どんな謝禮のおくりものをしたらよいのか。

どんな豐富な愛撫の言葉も、
最上とせられる歌の選拔きも
小兒の心の愛の中にあらはれた
天上の光榮と幻想の傍に在つては
空しいものとせられ
笑ひ草とせられないであらうか、
人生に於ける小兒は授福の役であり、
我々はただその福を受ける役割であるのだ。

日没前

未だ夜の帳の下りない
明るい低い陸地には
そこに停らうとする物は何も無く
すべてが、視覺に軟く
明るみのある影と、薄く陰つた光とが
路や路の邊にあり、
また太陽が照りつけを惜しむ時と
雨が戯れようと殘した花とがある。
それらの時も、唯過ぎ去つて

あなたにも私にも、善いことを言はないでせうか。
我等を造つて、そして又、殺す時は
あなたと私との戀を嗤ひます。
でも、もし、こゝの花の
春情溢るゝ呼吸の全き一時を見たならば
時は死に果てゝも、戀は
時が死に克つてあつたやうに
君主になるでありませう。

歌

戀は彼の眠れない頭を
刺薔薇の寢床に横へる
彼の眼は涙で赤くなつて
脣は死人のやうに青い。

恐怖、悲哀、輕蔑は
淋しい其の頭のあたりを去らず見張りをする。
夜が疲れ果て
世界が朝になつて樂しくなるまで——

喜びは日とともに來り、
戀の脣を横臥したる彼に觸れる
かくて見張りのものどもは幽靈のやうに
彼の枕邊から消え失せた。

彼の眼は、黎明の如くに輝きはじめ、
彼の脣は燈火の如くに紅くふくれる
悲みは一夜の間、勢力を占めるけれども
晝となれば喜びを伴れ戻す。

音樂

夜が、太陽と初鳥の響とで明け初める時
暗から話したのは光で、言葉から輝き出たものは音樂だつた？
去來の季節のきづなにつながれ囚へられた靈は
肉の械で卷かれて固く繫がれ、沒む光に眼も盲ひて
音樂の語られ、生の氣力が聞かれるまでは、決して
存在しなかつた。

日の出の姉妹、生食の先驅たるべき音樂が
人の氣力の夜明けの如く、奴隷釋放の如くにも微笑めば
自然の奴隷、時の農奴、生と死との奴僕、

たより無い、いやいやながらの呼吸を續けてゐる慾望の無い忍耐を以て沈默を守つてゐる
者は
その音を聞き光を見た。そして靈は應じ海とともに高らかに語つた。

朝は話し、彼は聞いた、そして熱心な靜かな晝は
彼のために沈默を守らなかつた
又、あの靜かな、み空へ昇る月からは榮光の音は下り
物靜かな夜に曉方の音の如きが聽かれ
又人ならぬ、それに人の靈が促され光明へ飛んだ鳥の歌聲からも聽いた
そしてその歌の唱はるゝ時、地の光と闇とは調に於ける絃の如くであつた。

別離

戀は、一日一夜の間
私等に對して歌ひ、私等と共に奏でた、
暗闇から、光明から私等を包んだ
かくて私等の心は
私等とともに彼の演じた音樂で滿された。
彼は私等とともに止まつて在る間
私等の心と脣とを以て演じたのだ
彼は一日一夜の間
彼の途中に於てこゝに翼を休めとゞまつた。

彼は見張りをする彼の敵から
彼の翼を以て私等を隱した。
射るやうな眼から、追跡する足から、
叱る舌から、私等をかばひ覆うた。
そして私等に禁じられて居る
挑花嬢の蔭にかくまひ
一日一夜、靈魂と肉體とを
悅樂の內に一つとならしめた。

然し彼の翼は、こゝにいつまでも休まず
彼の足も私等のために留まるまい、
朝はまた元氣よい勢でやつて來た
彼は一日一夜の間を
其の呼吸で樂しくした。

別　離

さあ彼を行かしめよう、
桃花嬢よ私等のために道を開けよ、
戀は其の絶頂に於てたゞ一日一夜だけしか
私等の間に續かないのだ。

海の戀

私達は今日、戀の陸に在るのだ
何處へ行かうか。
出かけようか、こゝに居ようか、あなた、
帆かけて出ようか、漕いで行かうか。
異なつた方向もあり、道もあるが
五月の外には五月は無い
私等は今日は戀の手に在るのだ
何處へ行かう。

私等の陸風は、接吻で追ひやつた悲しみの

それから、あの、ありし日の
喜びの呼吸だよ。
私等の底荷は一輪の薔薇
私等の道は神の知つてゐる
また戀の知つてゐる所に通じる
私等は今日戀の手にあるのだ。

私等の水夫は羽根のある戀の神
私等の檣は鳩の嘴、
甲板は精巧な黄金づくり、
私等の綱は死んだ處女の髪の毛
私等の貯へは美しい種々な愛の矢、
私等は今日戀の陸に在るのだ。

何處へ私走はは上陸しようか、あなた、
見知らぬ人の歩む野か、
ふるさとへ近い所へか、
火の如き赤い花の咲く所、
或は雪の花咲く所か
又、泡の花開く所か
私等は今日戀の手に在るのだ

私を上陸らせて下さいねと、女は云ふ
そこには戀が唯一つの矢と
一つの鳩と一つの心と一つの手を示す所に。
そのやうな海べは、おゝ、あなた
どんな男も漕いで行かないやうな
又、一人の處女も上陸しないやうな所にあるのですよ。

（テオフイル・ゴオテイエの作に倣つて）

ウィリアム・シエクスピアー

假令、人間の舌と天使の舌とが一つになつて語るとも
あなたを語り盡すことは難いであらう。
流、風、森、花、野原、山、それから海、
それらのものに、あの太陽を讃美し盡せるどんな力があらう。
彼に對する讃美は斯ういつてよい。即ち彼は誰からも賞め盡され得ない程だと。
男も女も、子供も彼がために神を讃へよ。
併、彼は崇拜されても得意になるものでない。唯、彼は存在を欲する
そのやうに存在してゐる彼は自己の作物の宜く出來上つたの見てゐる。
ありとあらゆる喜悅も悲哀も光榮も、權力も、歡樂も彼のものである。
彼が若し、無かつたならば此の世は晝もさながら夜となつてしまはう

永久なる時は、彼が永久なため兩者間の時の區間を辨じ得ない
あらゆる琶琵も、竪琴も、バイオルも、七絃琴も笛も、
彼の前には一絃も吐息しない前に既に默つてしまふ
あらゆる星は天使であるけれども、太陽は神であるのだ。

告　別

わが歌よ、出かけよう此の處を、彼女は聽いては呉れないだらう。
さあ出かけよう、此の處を、恐れずにもろともに、
最早、默つてしまはう、歌ふ時は終つた。
すべての古いもの、すべての懷しいものを歌ふ時は終つた。
彼女は、我々が彼女を愛したやうに
わたしたちを愛しはしないのだ、
さうだ、私達が彼女の耳許で
天使のやうに歌つたとて
彼女は聽いてはくれないだらう。

さあ私達は起ち上つて別れよう、彼女は知らないだらう。
あの大風の行くやうに海の方へ
砂と波とのあの海へ
そこに、どんな助けがあるか
何のたすけもありはしない、すべて、そんなものは助けにはならない
あらゆる世界は涕のやうに苦いのだ
どんなにそれらのものがあるか
あなた達が表はさうと努力したとて
彼女は知らぬであらう。

さあ、家へ歸らう、こゝを立ち去らう、彼女は泣かぬであらう、
私とそなたは戀人に多くの夢と保つべき日と
あなたが望むならばあなたの鎌で刈りたまへといひつゝ
香の無い花と大きくならない果實とを與へた。

そしてそれらは皆今では刈られてしまつて
最早刈り倒される一つの草も無い
種蒔きをした我々が今死にかけてゐるとても
彼女は泣いても呉れないだらう。

さあ、我々はこゝを去つて休まうではないか彼女は愛しないだらう。
われ〳〵は、これについて歌つても
彼女には聞かせないであらう。
なほまた戀の路が、どんなに難澁で險しいものかも見せないであらう。
こゝを去り靜に横はりたい、それだけで十分だ。
戀は苦(にが)い深い效ない海である
その上に花咲く天を見たとても
彼女は愛しないであらう。

さあ、斷念して身を水に沈めよう、彼女は氣にも留めないであらう。
あらゆる星が空を金色に飾るとても、
又、動く海が、その動く前に
月影が美しい波の花を造るのを見たとても
或はまたその波がわれ〳〵の頭上に走り
息づまる脣(くちびる)、溺れる髪を深く沈めて行くとても
彼女は氣にも留めないだらう。

われ〳〵は出かけよう、さゝ出かけよう、
彼女は見ないであらう、
然し、たつた、一度だけ歌はうよ
そしたら、たしかに彼女、彼女と雖もまた
曾て、ありし日と言葉とを追懷して
我等の方へ少しは振り向き、ためいきをつくだらう。

然し、われ〳〵は出てゆく、我々はかつて
其處にゐなかつたかのやうに
いえ〳〵、あらゆる人々が私を憐れと思つたとて決して
彼女はあはれと見はしないだらう。

フィリップ・マッシンヂャー

雲は正午一時過ぎに、此處彼處に起り、
吾が英國の空をば延びゆく横雲をもつて市松模様にした
かくて車輪を翼にした雷車の陰と音とが
間もなく大雷雨を起すために力を集めた。
その時あなたの曲調の朗かな靜かな溫い和聲が
赤く照つてゐる火星に傷けられない空の下に起つた。
圓滿な月の平和な火焰に滿ちて
そして星の銀の言葉の響のやうに。
莊重な又偉大な心のマッシンヂャーよ、
あなたの顏面は宴席に於ける顏々の輝きよりも

フイリップ・マッシンヂャー

遙かに莊嚴な優しさに充ちた崇高で憂鬱な光をもつてゐた。
悲しくそして又賢いあなたの深遠な歌を動かした思想の精神、
惡に對する和かに平靜な侮蔑の中に見えるおちついた悲みは
あなたの威嚴ある眼から忍耐を物語る。

春の獵犬冬を追ふ時（カリドンのアタランタ中のコラース）

春の獵犬、冬を追ふ時
月の女神は、牧場に平野に
葉の舌もつれ、雨の囁きもて
暗く風ある所を滿たす
鳶色の戀の夜鶯は、イティラスの悲みも
スレイス人の艦、見なれぬ顏
舌切られたる夜の泣き明し
あらゆる苦痛をやゝ忘る。

光の媛君、いと欠くる所無き女神は

春の獵犬、冬を追ふ時

春の獵犬、冬を追ふ時

彎(まが)れる弓、空(むな)しき箙もて
もろ〳〵の川のひゞき、風の響もて
水のひゞき、また威力もて來(きた)る
結べよ汝(いまし)が靴(くつ)を、いと早きもの汝(いまし)、
その輝きて疾く走る足に
日を行けば力無き車は生き
夜には青き西空(にしぞらふる)震ふ。

いづこに我等彼女を見て彼女に何と歌はん
我々の兩手(もろて)を彼女の膝のめぐりに置きて縋(すが)らむ?
男の心は火の如くに彼女に爆發せむを願ふ
火、或ひは躍り出る流れの力の如くなり
星と風とは彼女には衣服と
琴彈きの唄の如し

上る星も下る星も彼女に着く
南西の風も西風も歌ふ。

冬の雨も破滅も
雪と罪との季節も徂つた
戀人互に別るゝ日も
日の短く夜の長き時も
今は思ひ出に悲しみの忘れらるゝ時
霜は殺され花は生れ
綠なる矮林、または藪には
花咲きつゞき春は始まる

あふるゝ川々葦の花を養ひ
成熟せる草々、旅人の脚をさまたぐ

春の獵犬、冬を追ふ時

若き年の弱き新しき光輝は
葉から花、花から實へと育つ
實と葉とは黄金又は火の如く見え
麥笛の音は竪琴より高く聞こえ
サタの蹄　踵は
栗の根の栗の殼を碎く

正午にパン、夜にバツカス
足早の仔山羊にもまして足疾く
踊りつゝ愉快に滿ちて
ミーナドとバサリドとを伴ふ
笑ふ脣の如く柔かに
さゝめく葉は隱して分ち
追ふ神々を見せて

隱されたる女神を見せず
蔦は彼女の眉を超え眼をかくす
バツカス從者の
髮とともに垂れ下る
野葡萄は滑り落ちて、露に
輝く胸を約められて、ため息す
野葡萄は葉の重みに滑れど
小實有つ蔦は
隨ふ狼、飛ぶ小鹿を
驚かす所の足、輝く足に纏る。

著者より

今より八年の過去、ALGERNON CHARLES SWINBURNEの傳記や詩集を讀んで、人に示さんの念無く、他日、何か書く時の參考に、又讀んだことの心おぼえにと書き記したものを筐底に藏したまゝ今日に及んだ。

其の間、唯一度、何故か、我國人に親しまるゝこと至つて薄き、此の高貴俊秀の詩人に關するものゝ、一冊や二冊現はれてもよい、もし、かゝる親しまるゝこと少き詩人に關する予がこの作をも、金錢上の利得を忘れて出版する書肆もあらば、譯詩と更に原詩とを對照し、その誤りを正し、又 EDMUND GOSSEとTHOMAS J. WISE とによつて編纂されたTHE LETTERS OF ALGERNON CHARLES SWINBURNEからも、興味あるものを譯し添へて、かつて公にした『天才詩人バイロン』の傳記の後に、その『書翰抄』を附したるが如くにしようと思つた。

著者より

然し、關東大地震の災厄及びその後の我が出版界の不況は、かゝる一般の讀書界と緣遠かるべき書を出版するの書肆を夢想することだに許すべからざるものであつた。

この夏、一夕、友人、木内打魚君と東西の文豪詩人について語る。談、偶、このスウインバーンに關する原稿に及ぶ、氏は予が主宰する詩誌『新進詩人』の創刊十周年に際し予が朋友知己の、これが記念事業として、讀賣新聞社講堂に講演會を、又、銀座街頭、鳩居堂樓上に、現代名流詩歌揮毫色紙短冊展覽會を催しなほ記念出版の擧ある場合、これを記念出版の一部に加ふべきを勸められた。予は既に數年前に、漫然書き流したるもの、また譯したる詩には大に改修正誤を要すべき箇所の幾多存すべきを想ひ、躊躇する所があつたがそれは、この夏、敎職の閑なるべき頃、印刷を進めつゝ、添削するも可いではないかと說かれ、わが詩社の同人にして前記十周年記念會發起者の一人たる安部宙之助君の勸めもありこゝに至つてはじめて上梓することに決した。

然し、印刷は進むと雖も、不幸にして、昨年來の、眼病、また快からず、醫師も家人もスウインバーンの文字の小さい詩集及び慇懃、寬厚、友情の輝きに富む該書翰集を手にするを許さなかつた。乃で遺憾ながら疵を含んだまゝ出版した。

なほ一言すべきは人名、地名の發音は、DANIEL JONES 氏に依らうと思つたがそればかりに從ふと我國の長い間行はれた稱呼と太だ遠いものもあるので取捨混用した事だ。

嗚呼、予は不用意に無思慮に此の子をして初聲を上げさせた。あはれな、この子は、どんなに、はにかんで、その短い一生を終ることであらう。そしてまた五十九歳にして大學章句を成し七十一にして猶、誠意章を改註した朱晦菴の如き學者が、如何に、この不具な子を爪彈きするであらう。今、私はペンを投げて、韻律の妙を以て鳴る此の詩人の到底、譯すべきものにあらざる詩を譯し彼を冒瀆した罪を嘆く。

一九二七年の夏

著者より

昭和二年十月三十日印刷
昭和二年十一月七日發行

定價一圓五十錢

詩人
スウインバーン

發行兼著作者　正富由太郎
東京府豐多摩郡代々幡町代々木一四五五番地

印刷者　山元清輔
東京市下谷區坂本町四町目二番地

印刷所　敬天社山元印刷所

發行所　新詩人社
東京府代々幡町代々木
富ヶ谷一千四百五十五
振替東京六七五七二番

發賣所　成蹊堂書房
東京府澁谷町中澁谷
二百六十番地
振替東京四四九八八番

568
189

2年12月13日

調査済

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black